

南朝正平四年
北朝貞和五年 太平記菊水之卷

作者

北近二竹 田小出
本好三松 半後
兵 洛衛堂

扱も、其後、九十五代後醍醐の天皇の御宇逆臣相摸入道館倉と亡び、暫く王命よ歸すといへ共建武よ至りて、新田足利確執よ及び、義貞北國の雪よ武勇を埋み、楠正成は湊川よ忠戦の美名を流し、主上も既よ吉野山よ神隠れ給ひてより、後村上の院を南帝と稱し、北朝の帝を崇光院と仰ぐある、「國よ双の君が代や、南朝の正平四年ハ、北朝の貞和五の春、都よひらく王化の花、室町の武威ぞ昌あるすでよ、尊氏逝去の後、嫡男足利の義詮朝臣、北朝の補佐として猶も、南朝征伐の爲、大廣間よ出給へべ、御座の左」

ハ左馬頭基氏の嫡子侍従之助氏満其外仁本吉良上杉智勇の執事細川右馬頭頼之人も用ゆる虎の間の座間近く伺公有庭上又文者の譽名よ高き北畠の玄惠法印述作の魁本うづ高時繪の臺又積上覽又備へ扣らる侍従之助御前又向ひ先達て仰付られし書籍出來又付持參致させひと言上われペ義詮御機嫌うるいしく此程内見相逐しが文法といひ作意といひ適く當今聖德いみしく南方に有てなきがごとくかかるめで度御代を祝し則外題を太平記と名付未世の鑑となすべきと仰より列座の大名小名玄惠もはつとぞ感じ入義詮重ていかよ頼之先達て汝が術を以て打取し八幡の構敵方の要害飯盛又程近ければ破られぬ先此方々ちはやの城へ逆寄せんと師泰が血氣の斗略此義いかゞとの給へば頼之はつと畏り軍法するどき楠正行油斷ならずと存兼て忍びを付置たり敵の實否も聞定めずふかゞと逆寄せば若輩なれ共楠

正行、父又おどらぬ名大將、鹿忽よ寄んへ危しく、ほ運強き當家の鋒先、仁義を以て味方を招き、根を堅むるが肝要又ひと道理正しく相述らる。折もこそ有頼之が忍びの者、庭上遙々謹で、敵の様子を窺ふ所、此度正行八幡又押寄運を一舉々決せんとちばやを打立其用意、急々軍勢指向られ然るべしと言上す、間もあらせず出来る高の越後守帥泰、披露よ及べぬ執事の權柄、早出陣の鎧直垂、いかめしく御前よ向ひ、南方の楠攻のぼるとの注進、かく有らんと、我推量半途よ引受みぢんよあさん、かしる大事を前よ置落付た講釋無益の評義取置れ先達て願ひ置たる關東の管領評定有て然るべし、敵の殘黨ひそまる東國誰かれどいへんより師泰管領給へらば關八州の金鉄と、表へ忠義内心よ、天下を望む頬魂、それと悟らせ給へ共寛仁大度の御大將、汝が願ひも理よ當れり去ながら、父尊氏より以來數度の合戦よ大敵を討亡す事、是偏よ神代より傳へりし、日月

の御旗の威徳、則其御旗へあれある氏満が父基氏武功よりつて尊氏より預置て天下の管領、一子氏満受繼で日月の御旗守護の役、幸我娘棄末よ娶し、足利二代の管領とあし東國の政務を預くべしと重き上意も侍従之助、師泰はつと工の坪喰ちがふたるいがみ頬無念の角を押隠し管領の武家の重職、其機有かしらね共、ア聟入も管領も追ての御沙汰侍従之助の器量をためす幸の今度の討手、一方ハ某、一方ヘハ氏満殿とすする底意ハをびき出し討て捨んず悪工利き賴之詞を正し、執事共覺ぬ一言、只今君の仰のごとく、氏満殿より太切なる日月の御旗守護の御身、御出馬など、存もよらず、敵も限らず誰もせよ、心がけるハ此御旗もし紛失せば天下の大難、其所へ氣の付ぬ、鹿忽も存る師泰殿と工の的を射ぬかれてもすくよひ行ぬ蟹大名居尺高よせしら笑ひ天下無双の某でも、氏満殿より及ばぬ、傾城を酒で賣落す、軍法こんたん

きやうどい物と、氏満も當付る權威を高が非禮の雜言玄惠法印よくし
とや思ひれけん、すつと立寄御前の魁本を申下し、高々と讀上らる寄手
の大將高の越後守師泰古今無双の勇士の勢ひゆふくと扣へたりと
半分聞いて頭より出し、余所事かと思へば此師泰が手柄の段、出陣よ心
せけどこりや聞事並居る衆中も我高名後學の爲、アタマ其次あんと、アタマ
と志たり顔愚将の油斷ウタクへ寄手の大將楠正行年ハ十五の前髪立、軍立ハ
父の譲り、はげしき方便テダチより二萬の軍兵淀川へはつばめられ、大將師泰赤
はだか都をさして逃たりし、見苦しかりける次第と己が恥を讀立
られ、一座の手前赤地の錦ヨシタケも赤恥赤頬ブラコ命のねぐさるまいす坊主、我を
恐れぬ出はうだいいふて見よとつかみつかんすいがみ聲、ちつ共騒が
ぬ出家の道ハテ違のあい入幡の敗軍、有やうよ讀べこそ、貴殿の耳アツメもか
かる恥辱ヒジルと、下地の恥ヒジルへぬり志られナシまだ口叩くかづくようめ、其手

ほうげた切さげんと立寄を頼之押留、前成ぞ師泰殿、勝も負るも時の運、天下の鑑の其書物、其元一人の恥を隠さんとて、偽りを書ちらさば、義詮公の後誤末代よ残す所存よな、其義へ、サ返答なくば早出陣、いふよや及ぶ今退出筆先や口先を頼みせうより、腕よ覺の高名手柄、追付敵の首提ん、其時よ書直さず、合点かいもほりめど邊を睨でたつか弓、氏満來れど入給ふ、明智の矢先へ、細川の補佐の流の潔く、讀傳へたる太平記梓の花や玄惠が筆、言の葉ぐはのさかへ行國の春こそ「久しけれ

道行霞の魁

會稽山よ、ひるがへす、それへ古郷のから錦、是へちはやを出陣の鎧の袂、はる霞、たな引わたる山吹の簾、まつさきよ楠、帶刀左衛門尉正行へ、家よ傳へる故實のふぞしけ玄たがふ軍勢八尾平野、志貴の一族、和田の原、ふりさけ見れば、八十氏の流を守る神垣や譽田はるかよ、行空の鎧や峯の、

時鳥爰はとりあいみぞ八尾の其人ひとよ弓矢ゆみのやの歎かげへ事こととひしと思おもへば胸むねもくらがりの晴はるかを餘所よそみ平岡の社間やしろまち近く草摺くさびの草の霜しもさへ星甲ほしのかぶとつらなる諸軍並なま木きかけ、玄くわバシやすらふ陣床ぢんぢゆう几くい見渡せば外山の峯みねや秋玄あきくわのがけふの出で陣見送りとつまよ頭かしらをさげがみの長きのを祈ねがる長柄ながなごの酌くち早はやふがいちんましますやう敵てきよからぐりのし昆布こんぶ、いはましましまし吉例よしめいく、兼てのぞとく軍の評議志ひやうぎしき貴たかいかよ源八げんぱちつ共とも辞さするよ及みばず味方みかたの大事だいじに山手さんてのかため、けんそあ頼たのめど公家くわいの軍配ぐんばい、敵てきよりゆだんをうたべいかよ、それ故ゆゑこそ此手このての軍ぐん、よする敵てきを横切よこぎりよ射ひたて、かけ立たてあやまん、尤ひ尤ひなる計略けりやくなれど師泰しときの大事だいじの敵てき、平場ひらばふうけて山手さんてを切崩きりぬさんれいかよく、いかよくふ共遠野おとひのの霞くも雲くもの上帶うへ引立ひきだつる、敵てきをふびくふびく夫おとこの方便ほうびん思おもひぬ不意ふゆ不意ふゆよ寄太鼓よせたいこととつとあげまきや結むすび、合あたる其軍そのぐん敵てきれ多勢たぜい味方みかた小勢こぜい外ほかよ仕寄しよせい扱あつかいかよ生駒いくまのとりでよ湯淺ゆあさの庄司しょうじ

大和勢のたすけ有すへ思ふ圖と見る、あらば逃る敵の笠印、取て味方の逃武者と見せて敵のうしろへ廻りおめきさけんで打破らんよ何條勝で有べきぞ、まだ其上よ千變萬化、多勢を恐るゝ事なけれとげみいよ、ぎよき智勇の軍慮、かんするものゝふ女房も折を壽く詞のえらべ萬歳唱ふ松風よ吹ゑく、裾のゝ旗さし物のゝせ松原花田の何某先陣ぞどり、見へよける、ふくれじと早瀬漲る月かけの駒の手綱をかいくり、く栗生の太郎鎧のかた白安間殿と見しゝひが目か、その外三宅名取の勇士、蝶だて、かいだて、板持ハ忍びの達人大將悦喜の配采おつ取立上る、鎧の板尙うちかけの、おもきりさすが女氣の氣を引立る弓取の思ひを包むいさみの別れ、射向の袖よあらね共、涙の矢さき、居ならぶ勇者列を乱さず乱さぬ大將、乱るゝ妻、留主の守り、兼ての用意、かならずぬかるあがつてんと見送る出陣、見返る里別れて、こそ「たつかゆみ風新柳の髪

を削る柳の木影、數皮や軍慮を碎く楠正行帷幕の内、勝事を千里の野陣春風、旗手、ゆく數見へよける、かしる所へ軍奉行恩地左五郎、いさましげみはせ歸れ、ペヤ恩地云、舍たる諸軍の備調ひしかいかよく、仰のごとく殘らず方便、早速の勵神妙く、猶も大事以後の備兼て定めし捨がまり横合、切崩す相圖の狼烟急げやつと烈しき軍配、受るも若武者若草を踏ちらしてぞかけり行見やる向ふへ又一騎、かけ来るゝ舍弟次郎正儀、夫と見るより正行聲かけ、弟吉野の皇居守りの爲附置汝、何故え來りしそど尋、正儀、吉野殿を勅書有と、指出す一通はつと正行押載てさつとひらき、何と汝が武畧勇敷を以て玉財今迄恙なし、然るよ此度死を一戦と期するの條若討死と相定べ玉財を失ひ、其上よて死を相遂べき者ニ、正平四年正月日右大辨承ると、讀もおひらすかしる勅命蒙る事、恐れ有冥加なや、君も二代、我も二代、南朝の世、あし奉らんと、思

ふよかひあき君の聖運勅定へ重けれ共、武勇の節義も又重しと鎧の袖
みはらく、涙、かゝる勅定有上り、一先ちはやへ退陣をとすしむる弟アサ
愚カク之、死を常ハシマするが勇士のあらひ、汝ハ是ク都ミ登、足利の館へ入込、敵
の虚實キラヒツを計ハシマるべしと聞より正儀ヨウイ、仰共覺ハシマす、左程大事の此合戦カツゼン、見捨
ていかで歸るべき、此義ハシマに免下さるべしと、兄を思ひの眞實心立んづ
氣色ケイセキいなかりけり、こなたも義心ヨシハと恩愛エンアイよよりる心を取直ハシマし、ア聞分な
し、君への忠義を忘れしかハシマく、忠義ハシマ立ても現在の兄を捨るハシマ不弟アシタの
科アシタ、近付アシタ貝鐘太鼓カイガタガ、いで師泰シテイをと、かけ行あげまき引ソラムめ鹿忽ソラノシ、猪シバ、
武者アシタ大勢アシタの中へかけ入ば必定討死ヒツヂヤウシ、それ不便ビンさアシタ止スルいせぬハシマ、こアシタを能アシタ
辨アシタへよ、今兄弟共討死せば君の歎慮ハラリを苦しめん、汝ハ跡ハシマながらへて、楠
家の旗ハシマ掉終ハシマ、天下ミツタタひるがへせ、死るも残るも南帝ナンテイの爲ハシマ、かく大軍
を受たる正行モシ、若モシも運命フタナ、拙カタくば又逢事カタマリも是限カタマリ、よしそれも武門ブモンの常アシタ、君

が爲々捨る命露ちり何か惜からんと或ひ歎、或ひいかりのつびきならず此上ひ仰ひ從ひ是も都へ打立たてすよんチ、けなげに早いそげと勇を見せたる兄弟、胸より涙と目より涙ぬ心ぼそさよりる糸の鎧の袖よ露ふもき忠義の種たねや櫻井の親子の別れを今爰あそ見返り、見送る目に涙折から聞ゆるときの聲、正行きつと見返れば早調とよたる味方の陣所、小旗さばたさし物諸軍の印印、いざましましく、猶も方便てと帷幕の内入間程なく寄手の大將かの越後守師泰跡つよ續つづて山名軍太夫切先さき首指貫さしつらぬき、歟の大將正行てを討取たりと高名顔かうめい、適手柄あつわじてでかしたく、アは褒美ほめい國大名、我君くわんねい管領職しょくうちいさひやつ、天下を望我大望、正行めを討取した吉左右きつさうめでたいと、宛あき勇の正月悦えび、ヤア者共、向ふよ見ゆる敵の陣取ひつけり必定ひきだ失たかとかい立陣幕立ちまく引ちざれば、内うちよ稻村いなむらつゝくつく、中なかよ玄くろかけの楠くすめが一族原遠矢を以て打ちらせと詞の下した雨あられ、人音せぬいな逃

ほうちろく火矢音の流星蟲く猛火よ數千の軍兵半焼半死、命からぐ師
泰主從逃る向ふの高見る、旗押立て悠々と楠正行見參り、呼へる聲よ師
泰うろく、たつた今此山名が討取た楠正行、又爰へも正行とい、首が狐
か狐がきやつかどうろたへ眼の四方八方、狼烟を相圖の國の聲火のほ
とをりよ櫛の口の氷ひとけてうづまく水かさ津浪のごとく忽廣野たちまちひろの
鳴渡の沖浮つ沈んづたらよふたり、正行采配追取て、稻村よ射付たる、敵
のあだ矢だじやハ味方の矢種だねと下り拳こぶしよ射立させ、勝鬨かちどつと春風よ吹あび
かしたる山吹流し跡あとく數千の軍兵、體からだの重き石龜がめの高の師泰
主從が恥辱ちぢよを末世すゑよ流しける、草木よ心こころいなしといふ人の心、おだやか
あらぬ世よ、約さだをたがへず咲花の詠ながめよあかぬ都人賑よぎふ、中よ取分わかれて、侍從
之助の下館やかた岡崎おかざきよ名なはびこりし藤の盛さかりいいつとても、やしきの内へ
入込の人の群集ぐんじゆを咎とがめねば、花見毛鹿茶辨當もうせんちやべんとう樽たるよ詰つめたりおのづから、ふじ

見酒とぞ乞られける、此人立々徘徊し殿の奢ぜうを見出しつて、僭せうが高かうの越後
守師泰、焰魔えんま又隨したがふ安鬼の、黒塚源五がナ旦那、何とく、首尾しゆびへどふじや、仰
み任せに心をかけられし葉末姫のはづか殿へ參り、彼かれにみ局つばねよ取次頼んで
歸かつた、且那の文章ぶんしやう見られたら、姫の方からぐよやくと、お出であるい
追付おづけとのぼしかくればでかしたく、ハタ其そのに褒美ほめいのる意いみ付て、お頼の
子細こざいといつぱ拙者しょくしゃも同ひとし懸けんハ曲者くわくしゃ此屋敷やしきの家老いじだら石堂せきどう勘解由かげゆが妹ちあわ千束せんばく
器量きりょうよ似合にあつぬびんくと、口くちのこひいを乘すのへて見たいみたいのが侍質氣さむらひがた
とやりたけれと口惜くち惜いゝ幼少よしざうの時分じふ手習ならひせよと親共おやぢの異見ゐけんを用ひず、
かいもく參上仕らぬ、近比ちよぢお慮外おもひわい様ようなやが、且那のよい手てで、ちよつと一
筆遊あそべられて下さつたら、我等われらが懸けんハ慥たゞかよ叶はく、侍一人ひとりお救すくひど頬ほほも赤恥あかぢ
白洲しらすよ答こたへ拜あい、こつたやつ、懸けんハ互ひ聞き届た、千束せんばくと有あい石堂せきどうよ、心を合す
方便てんびんの一イ、隨分手柄がらよ手てよ入いい、然らばに書か下さるか有あがたしく、懷中くわいぢゆう

研料紙迄、是より用意と指出せば、成程、爰へ人立物かげへ、兄師直の隸
好み艶書を書したが、主よりちひみ書す者、源五一人、天晴僧の日本一の、
不器用者めと打笑ひ、打連通る廣庭の、水際立し奴の照平、旦那を待合た
ばこ盈藤の下なる薄煙ふく床几より共、それ草履取命取色取の奴殿、わ
玄や藤の様よりあの人よ、玄められたいと抱付、玄やらあ事岩藤のかた
いそこぞの手生の藤、紫色の入ほくろ喰付たいといふも有、諸方の蔓よ
巻付け、ほう／＼設る後の方、石堂が妹千束武家の手入の庭木よて、行義
ふりよき振の袖、羈衆お家の格式知あがら、男の傍へ猥あ事、そあ奴の
誰が歎して、御殿近ふ慮外者以來を急度婚ふと、呵る聲さへかひいらし、
そりや堅ぞふの千束様と一度よばつと立かもめ、尻こそべゆく照平も
そろ／＼部屋へ／＼不義者侍殿様の手廻りの大事の女中よ疵付た
憎が成敗、只今千束が手よかくると、玄つと手を取寄添べ、やまつびら

は免、そんあよわたしがこへいかや、こへい段かまつ四角な石堂様の
お妹に、お手討み逢ぬ先と、遙んとすれべ、よく殿様の廊通ひに異見の
爲と崩さぬ行義木でも竹でもない物をかたいといへるも迷惑さに家
老の妹こちやいやじや、照平様の奥様と、思ふて居るみどふよくな、女中の
の傍へ油断のならぬ、惡性仕やつたらほんぐり手討じやぞ、おんでも
あい事拙者も男せいもんお前のお手討あら、殺されても大事ない、そり
やほんかいの中間冥理枕の土壇の役用意りと、立つぱり濡る夕立の脇
ハ日照の黒塙黒汗業腹ながら認し、文を千束が振袖へ、投付睨付忍び入
忍ふ使と、ダ顔よ若紫のふ屋敷と尋小性の竹之丞、腰元あれや腰付の玄
やんとどこやら色深く、ナセあたぞお取次と、いふえ拘り飛退て、下良め
下れ、ナシく、俄々手をふる逃足早く、取上す氣を漸と、何方よりのお使ぞ
や、葉末の姫より侍従之助様へ忍びの使、御みの様子に、御祝言殊の外

延^のより成、姫君様も御待兼の催促、此文箱と指出せば、御尤^{アガ}く、此方の殿様も、お心せきり一ツあれど、先日より申通り、とかくお心持すぐれず御病氣の事は力又及べず、やこれ女中、我等の竹之丞と申てお傍小性、侍從之助様御病氣とい偽り、島原の領城^{けいせい}よお心を迷^{まよ}され、夫故の延引假初^{さあ}ならぬ義詮^{のり}公の姫君様お嫌ひなさるしか、是非今日の有無の返答承^{うけたまひ}らねば歸らぬといへれてはつとこたゆる胸^{イナ}鹿^{ヒツキ}忽千萬^カお御病氣を偽りどり何を證據^{しゃくご}今日返答^{へんとう}を聞切て、いかになさるしお使者の心^チ、品^モよつて御一門といへせぬ刀の切味^{あらわ}お目^チみかける、ヤ指參^{すばさん}とせり合^ハも、互^ミよ若木の花紅葉^{もみぢ}柳^{カキ}の間の障子^{しようじ}をひらき侍從之助のむつと顔^ツよい推量^{すいりょう}玄^{スミ}や病氣とい偽り、そこもかも達者あれど、用心の葉末^{かんじん}の姫が氣^{ムカシ}入ぬ領城^{けいせい}の肌^{はだ}を覺てからり、濃茶^{こいぢゃ}の跡^{せんじ}で煎茶^{せんぢゃ}香^か水くさい縁組^{えんぐみ}、鑿替^{くわく}する、使共追^おいあせ歸れくと逸徹^{てつてん}短^{りよ}盧^イ申^{マサニ}夫で^アあなたれ濟ませふが、

此方の姫君へ歸てどふも其通アにハれぬ念小指出た女めとぐつと
睨ムラシでよく見れば、必ヒツカならで傾城玉川アそちの太夫ヨシク鹿相カミサマおつまやる
な、葉末の姫の必吳根ヒツカワタケル、成程よふ見ればやつハリ必ヒツカ吳根カワタケルで有たよ
あ思ひがけもありアマツキよふ來たなアマツクくいやつ、憎いなせといふた
れ共大分證義サンギが有爰アシへうせう、アシと場アシうてぬ足取も松の位の徳有て、際立姿アシタヅシそれぞとい、玄らぬ千束が氣の毒顔アシタヅシ殿様アシタヅシナ余りふ呵遊シカリばすと、も
ふお歸アシタヅシしあされいで、アシタヅシいつかないなさぬ、憎けふ爰へ來たは、万アシタヅシ一姫
と祝言アシタヅシするかと、おれが心を疑ふてか、そんあ侍従之助でないはい、玉
川アシタヅシといふ美しい傾城アシタヅシをのけて、外の女アシタヅシも目もかけぬと、いふたら憎腹アシタヅシ
立か、但又嬉しいか、アシタヅシ何のアシタヅシ其様アシタヅシあさもしい氣では參アシタヅシじませぬ、思ひ
廻せば廻す程、おいとしい姫君様アシタヅシ、よくいやつアシタヅシ玉川め、私共アシタヅシが其傾城
ならふ姫様アシタヅシを嫌アシタヅシりして、一人殿様アシタヅシをいどしほがつては、よもや快ふ有そ

むない物、やつぱり御祝言遊べしたら、傾城も悦びそふな物じやぞへそぞ
悪い合意、そもそも誰も見かへる物、ヨレ疑ひをはらしてたもど、抱付き給
へば千束が、びくり後こうふと吹出す照平ひら、ひら使の小必玉川様の川
口で船、われて仕廻ふたもふお取置、ほんよ照平を歎あしてゑ、いつの間よ
やらつる忘れて、いつその事こと打うちたれ、竹之丞たけのすめたばこ、たばこと禿かぶが疊紙たてがみ太
夫殿の云付いづけで、重おもたい大小おほちご、左さんと、さ口上こくじょうをきつう出だかした、けふの褒ほ
美うつくいせんとの香箱こうば、千束必石堂へ沙汰さたなし、其かへりよ、最前ちらと取
て置た、照平との色事いろごと、おれもさたあし、なむ三寶さんぼう、きつい所ところを旦那おとこよ見
られ、千束様の異見ゐけんのためももふ上あつた、そんあら女夫打うちとけて、左さんと
きよといか、堅かたいきやつめを生捕うがた手柄てがら、爰らあれくわつと合あ点てんにや家老
よいられる事なれば、千石が物ものの體からだ、有あど、色事いろごとだけで僅わずかの金銀、廻まわるもの
事こと、石堂いしやまも、打うちて取計略けいりやくと、思案しわんの中なかを隔へだての襖ふすま、ぐらりと明あて石堂いしやま勧すす

解由はつと一度よ途を失ひ、遂行殿をやゝ、暫くお待下されど、呼と申めて兩手をつき、何故左様よに心を置るもぞ、傾城遊君よ戯るもれ、昔有武士のあらひ、義經の静^清に前後鳥羽院の天子あれ共、鷹菊を寵愛有、好色よ深きいよき武將の癖、左程の鎖細ある事を、心よかくる石堂と思召か、我等ふむいて諫言致さぬ其證據^{しじく}は是にらんせど傍^{かば}より黃金^{わちごん}の箱取出し、^{おもむき}寵愛の玉川が身請の金子、先達て親方^{おなじ}より價^{あたひ}を尋認置ついて、細川頼之^{とも}、今朝過急^{こんじょう}よ使の趣葉末の姫の^{ゑんべん}縁邊^{えんべん}延引^{いんげん}有事心得す、是非今日り、此に下館へ興^{おこ}を入れきとの事、此方の差圖^{さじゆ}を待す押て來るに、大將を功^{こう}よきる、細川が我儘^{きくわざ}奇怪^{きかい}千万、殿^{との}より病氣^{じゆき}と偽り、ばつかへして頬^ほ恥か^{はず}せん、其役目^のの玉川、身^の事^{こと}よ馴^{なれ}たる人今日の侍女良頼^{よし}すと有ければ、いあるともどうやらし不調法^{てうぱ}、私が、おつとすてよからふやら^{うや}れど、此事やよかる、扱^{あつ}く、石堂^{いんくつ}の偏屈者^{へんきょしゃ}と思ひの外適^{ほかされ}の忠臣、照平千束、

も氣づかひすな、最早遠慮へ、ナイへ花見よ紛てさつきよから、やり手も花車も、藤より長ふ待てぬる。サア太夫様は出と、奴がたいこ打和らぎ皆々、奥へ入給ふ、早姫君のほ入と案内も重き管領職細川右馬頭頼之、それ志やの徳へ、あらひねど廓氣放れし侍女良、おめず奥を出向ひ、ほ苦勞^{くらう}よ存まず、此頃病氣の侍從之助へ押ての嫁入天が下の鑑^{かゞみ}又成頼之様、ほ祝言^{しゆげん}のならぬ事へ、定てほ合点の上の、ほ興入でござりませふと、そつと批太刀を打かくる、管領職と太夫職、侍從之助の計^{はから}ひと見て取頼之、ほ興入の後程義詮^{のり}公^{カミ}侍從之助殿へ、遣^けはさるも聾引出物一々ほ受納^{じよな}下さるべし、ゾレく音物を是へ持參仕れ早くくと下知せらる、答^{こたへ}はさつと炷物^{たきもの}の音^{おと}よ聞へし、名木^{なぎ}へ、島原よ名も陸奥^{みちのく}の、情の關^{せき}を越路^{こしお}よ、通へど淡路^{ひんば}おのこ^いとも負^おて泉や都方^{まち}、負^おと小妻^{づま}の、八もんじ二八の花^{はな}の吉野^{よしの}かや、女中^{めのわらわ}頼之が心を尽^{つく}せし、聾引出見られたか、聞及ぶ侍從之助殿^の、傾城^{きんじやう}といふ病氣

有由、ゆ興入の延引も夫故と察したり玉川とア傾城ハ、一人より限るべ
からず、日本より玉川といふ名所六ヶ有事、哥人の言葉も顯れる、此五人の
傾城も、皆玉川と名を付て、合て六ヶの玉川をみやづかへ奉る、ゆ縁組の表の
式目、義詮公の上意を立る斗のゆ興入傾城の氣慰、幾人有ても苦し
からず、姫君も且以嫉妬の心、ないといふ證據の引出、大將の詞を立るか、
反古よするか二ヶの返答、待女良の心もあらん、哥人の居ながら名所を
立る、管領の天下の人を知、彼六ヶ玉川の、其一ヶを見た故も、ア渡す思案を
せよと傾城も轡をばめて右馬頭、走づく奥へ入るける、玉川はつと心
付義詮公の乙の君、葉末の姫様、乙あたへと都が手を取撃^{はぶかり}やと、上座も敬
ひ奉り、嘸^{さそ}ふ腹が立ませぬ、大事の殿御も惡名付た、玉川の私ども言ぬけ
ても殿御も惚たといふ大罪も、どもも詞がござりませぬ、何ともアよぬ、
御祝言させますア譯堪忍なされて下さりませと庭^{まち}より黛^{まゆび}付けられ、ア夫ハ

誠か忝ない、そもそもじよさらく、恨あし、恨る者い我身一つ、傾城み成たら
べひよつとお氣よも入ふかと、あの衆頼で此間里の風俗習ふえ付不調
法あ此葉末、お嫌ひあさるれ、御尤玉川殿の情よて益玄たら身の本望、傾
城の君といふ我君様も同前よ、あだ疎よい思ひませぬ、心を推してくれ
レ、頼まるゝ程冥加なさ汗と涙の玉川が、もふおつ志やつて下さり
ますあ、今迄お前の殿様を借て居た其かれり、命えかへて添しますと、立
て行先ニレヤ、千束が萬事呑込んだ、お前の心底かんじた故、兄様と心を合せ、
ふ、忝い、玉川が爰よ居ていけつゝ御遠慮大事の妨やり手禿ハ皆先へ陸
奥様淡路様、皆ひ苦勞御一所よ、アイ、挨拶仕課せた、仲人ひよい様よとい
ふも恥かし葉末の姫、ほんよどうとい有がたい、傾城様と伏拜む江口よ
あらぬ出口の柳、島原さして立歸る、始終窺ふ高の師泰、姫よひつたり後
抱、驚く千束を捕ゆる黒塚、義詮公の姫君氏満様のほ簾中、聊爾仕や

るを歎さぬと、聞もあへず大馬鹿め、侍従之助もうつぱれ、領城も成た徒
めらう、姫などしげ穢けがらいし、島原の遊女、越後守が目も入て、只今身受し
てどらす當時の智惠者と口を利、細川の大だけ義詮公よ恥をあたへ
た、今日の次第言上して腹切すべいためうせいと引立行、暫しくと右
馬頭、藤の本よつしと出、武士たる者の一言を出せば、先へ腹の突出して
有頼之が腹切切ぬ貴公のお構ない事、今日密のお興入の義詮公の御誕
意、そも此氏満殿の館の大切の家去よよつて姫君を遣へるゝ事、尋常
の縁邊べんよかへり、畢竟義詮公を付置るゝ隠し目附、證據じょうきょの此大將のば
はかせ、是を帶たぐし給へば今日の義詮公政道初めなざるゝぞと、床几ゆづきよか
からせ奉り、大地よ平伏ひらくしければ、頼之師泰、女ながらも政道よ預れ
ば、何事も聞捨ならず、今の世よ、天下を望む曲者有が、そち達の氣が付ぬ
か、師泰よく存じておる、其曲者の楠正行くわ、達たつふた、然らば何者な、外

迄もなしそふいふ其方アこりや脇アモリがひつくり返る、ア聞へたく、此程
姫ア戀煩アフラひ、右馬頭アシカウドの氣違アガハシひの守アシガリを立てきたな、日本の管領アシガリに邊アシガリよ相アシガリ
應アシガリ、亦役目アシガリ、越後守アシガリの聞耳アシガリ持アシガリぬと、すんと立アシガリを待アシガリく、そちが天下アシガリを望むと
いふ、證據アシガリを見せんと袂アシガリより、取出し給アシガリふアシガリの覽アシガリへの艶書アシガリはつとアシガリ思へど
ひるまぬ顔アシガリ此師泰アシガリ、こなたアシガリよ狀付アシガリた覽アシガリへあい、よし有アシガリよもせよ、それを以
て天下アシガリを望む證據アシガリといアシガリ、其子細頼アシガリ之アシガリが申聞アシガリん御邊アシガリ先日アシガリ、義詮公アシガリへ何
と言上せられしそ、侍從之助アシガリが葉末アシガリの姫アシガリをナ受る下心アシガリ、義詮公アシガリの聲アシガリ
成アシガリて、天下アシガリを奪アシガリひんとの工謀叛人アシガリ、紛れなしとナされしを、早くも失念アシガリ
めされしな、それ故アシガリこそ侍從之助殿アシガリ、祝言アシガリの延引アシガリ、此疑アシガリひを受まい爲
病氣アシガリとの偽アシガリり、天晴アシガリの智者アシガリ、其心アシガリを悟アシガリりし故アシガリ、領城アシガリみ仕立たる今日アシガリの興アシガリ
入り、此細川アシガリが誤アシガリりか、人アシガリを咎アシガリる師泰殿アシガリ、姫君アシガリ又不義アシガリ志かくるアシガリい何アシガリと謀叛アシガリ
で有アシガリまいかと、きめ付アシガリられてはつと誥アシガリり、夫アシガリ、夫アシガリ、身アシガリが狀アシガリ

で、此家來の黒塚源五、やと夫へあんまりねどうよく何の拙者が、ぬ
かすまい、此状へ紛ない、儕が手跡證據へ是と千束が、懷引出す文へ、
れ夫へ、不義者め、儕が千束と付た文、此文と同筆なれば、姫君も不義志
かけたも儕と極る、主人迄疑ひ受さず、よつといやつ、夫へ、最前おまへ
よ頼んで、言譯くらひ物ぬかすあと、無肺のむね打里うくく、手あ
らひ嫌ひの其報ひ、是がほんの無筆の難、ほ免くくと泣わぶる、物かげり
石堂勘解由、照平が襟がみ、撫廣庭とどふと打付、ほ上意のかしらぬ中、殊
千束と密通の下郎、只今手討とふり上る、待た早まるあ、不義故よ切時
れ一人ならず、こちらも、刀と血が付ねばならぬ、血付ぬ様と助るも、自
か祝言志たさ、情けと相身互ぞやと、詞の末の有がたさ、只ほ慈悲と計よ
て、合す兩手をぐつと搾すへ、儕仕合者、不義計で、石堂が邪魔めら
う勘當するを悦びおらふと、立蹴とばつたと蹴飛せば、ナシ細川、不義者へ

きやつら計、師泰が體へ清淨潔白、不義の詮義を姫がやつぱり不義者、な
せどおいやれ、祝言の盃せぬ内に、まだ夫婦であり侍従之助も、ちわ文書
て持てきたり是も同罪、最前其文たくつて置たゞ、これ必開かれな、ヤ構ふ
まいと、上包^{うぶみ}さつとひらけ、艶書^{えんしょ}あらず何じや、氏満殿への智引
出東國ニケ國宛行^{あておどな}る義詮公の^み教書理不盡^{じん}、奪取れしり、是も謀叛^{むほん}
と讒言^{さんげん}すれば、邊^へ腹^{はら}も切ざるれ共、左様の意路^{のりぢ}頼之致^{ねらひ}る以後を
きつと謹れよと、仁義^{じんぎ}返す詞なく、奉^{まつ}を握^{つか}てつゝ立べ、いぎ姫君^{ひめ}興入の
規式相濟^{しあわ}ば、^ハ祝言^の重ての吉日、^ハ歸館^{きくわん}の^ハ供師泰殿^{ごうし}といひれて挨拶^{あいさつ}
ぶつてう顔^{がほ}不義者、儕^{とも}も只今暇^{ひま}をくれる、勘當受れば遠慮^{あんりょ}ない、あの
照平めを合点かと、何があいふりを右馬頭^{うわとう}ソレ熙平も黒塚と、勝手次第も、
立てうせふと氣を付て、出行細川石堂も見送別れ入折から、源五が弟黒
塚源内、手の者引具し馳^{はせ}來れば、ア弟か、悲しや勘當受たれやい、氣遣ひめ

さるな、身がたり立たてあたの忠義我君、甚しがんしん、ア照平兄貴の戀人
渡せく、アあまんじやこめがほざいたり、千束がほしく己が首、頼み
の印よ置いていけ、ア物ないせそ打殺せど、下知の下よりむらがる大勢
片はし、撫切、まくり切、堅割梨割向ふげさ、ぐつ共すつ共、あをち死、さしも
手利の働く、もてあぐんだる、黒塙源内、ねらひすまして突出す鎧、心得ひ
らりと藤の棚、飛付拍子よ蹴落す鎧、又取直してつしかくる、鎧の玄ほ首
むづと握り、ヨリヤくと捻あふひま數多の家來が奴方々上るハ藤の足代
や命限りよ戦ふ照平、下よひあぶく怪む千束、ゑたりと撫黑塙源五一
間よ始終侍従之助はづす蚊帳の釣手の鍵、源五が首筋ころく、傍
女め投たぞよ、又起上れバ引ばられ、目玉飛石鼻柱、花も命もちりトヨ、
叶ぬ敵せと逃行源五、ちり残つたる源内が眞向目宛よ突おろす鎧よ
體でんがくざし、一本ざしの照平ハ、手柄奴色やつて、だいなしだいも

ん表門勸當の身はばかり、憚ともだつもないく、奴かふれくく、大手をふつて出行、御門不義者やらぬと一間よりてうど打たる情の露あ、あつたら奴めほうびの花心こころの付つも廓くろわの徳達者とくだつしゃでおれと跡あとづきやり、忘れぬ御恩おん、かたじけあい、つきぬ御恩おんの御禮ごれいもいつ歸りこん花かいらぎ驟ののやかたをいでし行ゆ。

第二

西國四國回國くわいこくのえらぬ旅路たぢの道みちあるべ、是より北京街路かいじょう、是より南みなみへなら道みちと、教おしる道みちハ聖ひじりより、物いふ石いしぞ有あがたき、爰あニ此頃名なまも高たかき三人組さんじんぐみと云いはやし、其名なまも隠かざれ荒八二藏半助はら、逆頭あたまハ無上むじやう、又また光ひれ共とも、なかへ光ひらぬ木木綿めん島しまかはらけ色いろのとろめんとろめん、垢あかで鼠ねずみ、又また色上費いろじやうひ、尺八逆はせはあたまも内證ないしじょうハすかんびんあるかで島下駄しまげた、さあがら在所だての男作だと恐おそるゝ者ものハあかりけり、二藏くわんよ半助はんすけよ、わいらもおいらも、此在所だてで三人組さんじんぐみといひれて、隠かざり

れのあい男作、なんぞむつかしい出入りないか、と有ぞよく、跡の月の
晦日^{つゆのひ}の晩^{ばん}、宇治の橋詰で、借錢乞^{しゃくせき}み出あふたれば、玄やでもひでも取ふ
やならぬとぬかす故、わしもよつ程手^{あま}余つたれど、ぬけつくづつ、と
うく踏^{はん}でこましたひいへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
べ、其夜のねにくい物玄やぞよこねよくいで思ひ出したう夢はんじの
在兵衛、奇妙^{めう}な夢をはんじるげな、そこでおれが思ひ付、三人が同じ夢を
ひふて、いて慰^{なぐさみ}がてらはんじさせうじや有まいか、こそやよから、何じや
有ふとおれが先へ咄^{はなし}たら、其の通を二人ながら跡から咄せ、もしよふは
んじふらみやたらんでこます、^{サア}こいくと三人が打連立て行向ふへ、
夢はんじの在兵衛といふて口利^きかた親仁、河原傳^{はらぶだ}ひをきかしれべ三人
ハ立とまり、よい所へ親仁殿、こちらがかいつた夢を見た故はんじて貰^{もらひ}
今こあんの所へ行の玄や、幸发でちよいとはんじて貰をかい、そふじ

やはんじてむらをはんじて下されと、口よいふもあたまがち、在兵衛へ打點うちき、三人組の若い衆、こなた達の夢なら囁ささきみのよい事、わしも聞てたのもしか、幸あじみの此茶店、囁さささんたゞこぼんかりまよよど腰打かくれ、三人、床几ゆせきの上よ高あぐらくづわしから咄つそかい、聞て下あれ、夕部の夢よ、蘿苞わらびを見ましたが何とよい夢でござんすか、但ただし悪いかどふでござんすぞ、親仁殿アマニ、よい夢共ともく結構けつこう、あ夢見さえやつた、わしらでも覺が有、人の所へ物をやるよ、蘿苞わらび斗たたかいやられぬ物、何成共相應うまいむすびな物を入れてやるがお定じり、すとやわらづどり、人よ物貰もらふ瑞相まことあわせめでたい夢玄くじらや、遣付けんぶつ出世めさらうと、聞ても元が指事ことじ、ひやうまついて残りの二人、此二藏が夢も其わらづと、半助も同じ夢、そんあらこなたもわらづと、こあたもか、同じ夢のわらづと、三人あがら出世仕やんすかの、ヤそぎやいかふちがふ事、同じ夢でも、こあた衆のわらづと、きつうわるい、こ

なたの人は擲たきれるか踏ふれるか、きつういたいめとあふ夢じや、又こちらの入り、井戸へはまるか、川へはまるか、水難すいなんとあふ夢じや程よ、隨分用心おもひがよい、と聞て三人せしら笑ひ、ト同し夢ゆめたりひづみ、うさんくさいはんじやう、但ただし何ぞ見付た事、ヤ見付た事ことのあけれ共、今もいふ通つうわらづと斗とうり貰うけいぬ、中なかよ何ぞあければ叶かなぬ、そんあら初手はじてよ咄とつした人ひと、出世するよ違ちがへあい、又二番目めつまめ、中の物ものを出して玄げんまへべ明あけがらのわらづとじやよつて、庭にわへでも捨するか、捨すれば人の足あしよかしらよやあらぬ、そこで擲たきれるか、踏ふれるか、二ふたつの中の通つなれぬつながく、そんなら又わしが夢ゆめの廻まわへ捨すられ踏ふれても、まだ邪摩じやまよ、成なよつて、仕廻まわの果ごと川へほられる、夫おで三人めよいふた人ひと、水難すいなんとあられる、といふたもほんの當前とうぜんの理屈りく、何どうそふ玄げんやござらぬかといへ共三人あざ笑ひ、ハ返答へんたつあければ床几ゆかぎをおり、かふいふ物ものの、必心ひしんとかけさせやんあ、あふもふ

しきこなた衆よ、逢ねばこつちも口たしかぬア黃檗へでも參つてきまえ
よ、そこで緩りと一と云捨てこそ別れ行跡よ三人顔見合せ、夢はんじ
めが出次第よ、様々のよまい事、志たが能慰で有たあと、打笑ふ折こそ有、
千束が行衛尋んど、眞黒よ成て黒塚源五、大勢引連かけ来る、ヨリヤク里人、我
我ナシの都ナシ來りし者、此近邊キンペイハ勝手玄らず、案内知たる者あらべ召拘メシガヘて取
せんと、聞ナシる三人我一と源五が前よ両手をつき、私共ナシハ當地の生れ名所
舊跡残らず存ておりまする、お拘カツヘなされて下さりませど、聞より黒塚ぐ
つと目をむき、アばかくしい何の名所、都ナシ人を尋よ來りし者、此所迄
付込たれど、かいくれよ見失ふた、夫故案内頼のよ、玄かし三人ハ過る、先
あ男めすばやそふあ眼付、憎一人拘カツヘてくれん、身よ付て案内せろど、聞て
荒八ぞくく悦こび、ア夢はんじがあふてきて、出世の種ナシと両手をつき、
ナセ侍様、其お尋あはるゝ者の年恰好カツコウい、一人ハ十六七ナナ歳娘、今一人ハ

廿計な奴めお、夫あれバ心宛がござります、何ぢや有ふと私よ付てお
出なされませど、あてどいなけれど口車よ乗たる黒塚でかしたく、い
そげく、と先よ立、主従諸共急行く、跡よ二人ハ業くさらし、けたいな
侍、二藏よこい出端でばなあと、呑でこまそと菱簾の内へ入日かげ、まべゆくて
袖やかざすか、忍ぶ身か、千束を先よ照平が笠もわらぢも並木影なみかげア
千束様、京から爰迄も三里の上、余程足よつおきみが入た、お前よもお草臥くたびれ、此
茶屋で一休やすみど、腰打こしかくれば俱よ立寄たまよ、かよ館を立退ひりたれば、いやでもお
うでもお前の女房、夫よ結構つけがうな詞付ことば、嗜たしなんだがよいわいあと、いふよ照平
打點うち、わしもそふ思ふてゐれど、結構つけがうな振袖と奴の身の上、だいなし
形が相應さうごうせぬ、亥かし是すこでも濟すこぬ事、詞を直してやりかきよかい、ヨリヤ、こち
の女房共、是すこでよいか、定じてけふい亥いんをかろ、お茶おちゃでもお上りなされま
せぬか、しまだいのと寄添よそも、女夫めふ初めのよしめ言、内うちよ聞ゆる二人の悪

者、奴と娘の二人連今の侍が咄の人相引捕へて褒美ほめせんと高くしりしてのさべり出開うつしい女中様、宇治の蟹見あらたんと有所へ、連立ていてえんせやんゑよかいイ蟹はたるより女中様の腰付ひさ、畫中でもひかく光る蟹より見事な尻つき、ちよつと爰らをヨリヤホて轉業てんげふ有何ひろぐと半助が片腕かたわざ取て捻上ねぢれべイ奴様、其手を捻てどふさんすと胸ぐらゑつかと向ふどめイてむゑやくあとすかうべ摑つかんで押付られ、大地へ脚もよへ込ニ藏、又起上つてむゑやぶり付をよみ踏付ふみく踏付られ、半死半生半助が猶もかかるを引かつぎ傍かたへの流へ眞倒まとう千束が傍きよあぶくと心をひやす折からよ、取て返す黒塚源五黒塚源五照平千束見付たく、此鼻はなが大事の戀人、乙つちへ渡せば其通異義ゆきよ及ぶと命があい何とくと呼ハレれば照平聞より打笑ハラせうこりもないはい虫めら、手並ハタハタ兼て覺あらんヨリヤク千束、こいつらを片付て跡から追付、此村はづれよ待てぬやど、千束を先へ

遁やりく 拔放せば、そうへさせぬと黒塚が、打込刀をはつしと受^{なまき}なき
立く 切まくられ、叶^はりぬ赦^{ゆる}せと逆行を遁^{のが}さじやらじと、おふて行、始終^{しゆう}
の様子^{やうす}を松かけよ、戻りかゝつて立聞在兵衛、木影を出て獨言^{ひとりごと}、扱奴^{いぢ}いき
つい手者^{てしや}大勢相手^{よし}よ、あれく 切たり、ともつよいやつと伸上り、く、今
の女中^{めのわらわ}へ遅延^{のび}たか、あの大勢のやつらが取て返したら嚙難義^{さきなんぎ}、儘よ、こち
の身^みよかけ構^{かま}へぬ事^{こと}ぞ、一人つぶやき行跡^跡を、やよ親仁様^{おやじにんさま}、在兵衛様^{おひょうえ}と、半
助二藏^{はんすけにいざう}がはい出て、ア、お前様^{おまえさま}へきついた見通^{ひとと}し二番目の二藏^{にいざう}へ踏れる、其
跡へ出た此半助、川へはめられ水くらふたひ、扱もあらそれぬ、と思
へば荒八め仕合^{しあわせ}者、此上の^{じょうじょう}情^{じよう}より、どうぞ内迄^{うちごろ}、お前の^{おのれの}肩^{かた}よ、かけていん
で下^さりませ、と拜^{おが}む片手^{かたて}よかむ手涕^{はな}、涙より猶哀^{すが}なり、在兵衛^{おひょうえ}の氣^きの毒^{どく}
顔^ほ、夫^あきつい災難^{さいなん}、とふでわしもいぬる道、送て玄^{くわん}ぜうと二人が手^てを引
立く、歩^あしが人^{ひと}を助る^は、善根功德^{ぜんこんごく}、今^{いま}の女中^{めのわらわ}を助る^は、是くつきやうど。

道あるべの立石と兩手をかけかいとし、引抜て一息つき、又埋直す
北南、ふりかへて跡踏付。是でよいぞと點きく。二人を肩と引かけて、我
家をさして立歸る跡へうろく。大勢引連取て返す黒塚源五、照平めを
出しぬいて千束を我等が手と入る、こつちへうせたよ違ひない、皆々つ
づけとかけ出せば、家來がとゞめて、やく、そつちへ行ば元の京へ戻
ります。此石の書付をじらふじませ、といへ共一字も讀ぬ黒塚家來が見
る前面目なく傍へ立寄。角内用が有爰へきらふと招き寄、汝の譜代の
者なれば、我心底を包ず語るよつく聞、某が先祖の世と隱あき守敏僧都、
彼弘法大師との火を摺たる中なる故、其大師めが教たる、いろはの文字
を讀時の忽先祖の罰があたる爰をよく心得て、汝あの石の書付を、高ら
かよ讀我よ玄らせ、其爲よ一大事を物がたるまくこいと立戻り、まく角
内、此せど際々其書付讀である隙がないそつからよめといふよ角内立

寄て是より北へ京街道、是より南へなら道と讀も終らずもふよい／＼なら
街道へうせたゝ治定北へ京道南へ奈良者共來れど逸散よ元來し道へ
「立歸る歌人の言葉の種の山のみか、名所多き宇治の里、川の流を、姿見よ
たしなみ、嘆し山吹の盛り余所も及びなき、世渡りよ掉さし廻る網舟の
楫子の六が舟さし廻し、アレく夢はんじの在兵衛殿が様端よむまふねて
居らるゝほんまゝいやあわのわろも毎日／＼朝の夜から方々の夢合夢
はんじ、大勢の人出入よ草臥ての晝寐である、又其だいよ禮物の包銀
包錢米やら麥やら玄こだめて内證ふくつん、おこしてこまそとゞつて
う聲、ア、イ親仁殿、在兵衛殿と、川からわめけば目を覺し、むまふねてゐる
者を、あたやかましいたれ玄やい、イ、網舟の五作でござんす、此ぶつそふあ
ふ明ひろげてねて玄やふよつて、それでおこしたのでござんす、いのぞ
そりや近比過分したが用心するに持た衆の事いの、何盜まるゝ物のな

いこちの内、^{イヤセ}きさんじな事ぢやてや、そふもいへんすあ、夢はんじの
禮物の溜り銀、裏の梅檀の木の下よたんと埋^{うづ}で有と、近所の噂でごんす
ぞへ、^{ハチ}めつそふあ、そぞやおれが梅檀の木を大事とするよつて人の
悪口、此在兵衛^{ムシエ}銀が有ば聟^{アシカ}や娘^{ムネ}養^{ヤシナ}はれてゐぬわいのほん^{ムシ}夫も
そふかい、有^リいふてもない物^ハ錢銀、又澤山^{ハゼサン}なればつち坊主^{ハシマニ}と上かん
や、こちらもいんで息休めよ、八文^{ハチモン}がの引かけふと舟を廻せば在兵衛^{ムシエ}
酒^ハよかろど、立別れ納戸^{ハシマニ}をさして入^ムけり、橋一つこして籠^{ハシマ}隔^{ハダ}つれ
ど、氣^ハ隔^{ハダ}なき聟^{アシカ}勇助^{ヨウス}、用有そふよ窺ふ軒^{ハシマ}端^{ハタケ}、家^{ハシマ}よ巢^{ハシマ}をくふ燕^{ハシマ}の戸口をく
ぐると羽をちゝめ、ばつたり落れば是^ハ、折鳥^{ハカラサ}よがなおれしかど、立寄
る前へ又一羽^モ澤山^{ハゼサン}な燕^{ハシマ}の頗死^{ハシマ}と、つぶやき捨る表の方^{ハシマ}見馴^{ハシマ}ぬ女中の
供廻り此家へくるハ合点行す様子あらんと小柴垣^{ハシマガラ}身をひそめてぞ窺^{ハシマ}
ひゐる、川風^{ハラカ}の音をり戸吹返し、紅^{ハナ}あらぬ白菊^{ハシマヒツジク}の枝^{ハシマハシマ}携^{ハシマ}し、取なりハ花

よりも猶ほんじやりと、糞屋の軒のき又立たつまり、皆みなの者、此家の主ぬし又用事
有あべ爰わらを遠とおざけ歸かへりを待まつと、云捨戸口いりぐち又立寄たまよせ、在兵衛ひょうゑ何氣なまづきあくひよ
かかく出でかける表口ひょうぐち、顔見合おもてあわせて、悔うらやまりし、是これへくつるつるみ見み馴なれませぬ、お歴れき
歴れきの女めの中様なかがた、何ぞなんぞ用もちでござりますか、といふよこなたも會あつ釋しゆして、こあ
たが夢合ゆめあ夢はんじよ奇妙めうしあと名なの有あ在兵衛殿ひょうゑでんか、自みづからくわすくわきだわきだわき、
補帶刀正行ほたでとうじゆぎょうが妻秋つま秋あき、
條じょうといふ者もの、こあたの事を聞及きみそくびわざわざく尋たず參ねらりし、と聞きて在兵衛眉ひょうゑまゆ、
皺しわよぜ、夢合ゆめあ夢はんじよふか合あわせぬぬ宛あわせつぼうの子供こどもたらし、誰有あるふ正
行様じゆうがたの奥方おくがた様さま、聞及きみそくんだとおつ志しやるを無む下げみお歸かへしやも慮外りよがい、
への詞ことば又付き、玄くつろとやかやか又坐おき又直ただり、聞きも及まつべれん夫正行おとしゆうぎょう、四條繩手よつじょうじょうしへ出
陣しんの跡あと、軍ぐんの勝負しょうぶ、夫おとしの身みの上うえ、察さじよまだろむ夢心ゆめじん、自みづが庭にわの菊殘きくざららす
咲さくしと見みし正夢じゆめい、目めさめて見みれば此このごとく、咲さく乱まつれたる菊きくの花はな、尤おほ四季しき
よ花はな有あ物もの、咲さくたよふしきしきなけれ共とも、夢ゆめといひきのふ迄つひまで昔むかしさへなき此花このはな

の俄々咲たり善か悪か、女心よさげぬ故、此夢はんじて貰たるよわざ
わざ尋來りしと、盛の菊を指出せば、ためつ、すかめつ、ハチふしきと花打守
る折からよ、うき事の數々心よ山吹の、花も姿も忘はれ咲手よ持あがら、
指覗き、どし様内よござんすかと、はいり兼たる娘の聲こゑ、ふせんか、だん
あいお客怎やすつとはいれ、先問とびたいへ聾殿の身の上、首尾しゆびへ何と怎や
氣づかひなど、どれれて娘が曇聲くもこゑ、お前も知てござんす通り、短氣よ生れ
たこちの人、友達衆と云ひよかひ、切たとやら突たとやら代官所へ断て、
げしよん取とわつばさつぱ、庄屋殿が挨拶で五十両で濟すむけ寄せられど、高の
志れたやさしい家財、賣代なしても僅わずかの錢、外よ才覺仕様もあし、どふが
あと案じ寐み、ふしきな夢を見た故よ、お前よはんじて貰よきたと、咄せ
バ聞る秋篠あきしのが、こつちの夢もさぬ内又も夢かと、ふしん顔、娘の何の
氣も付ず、夢よ見たのい爰の内、お前が日比大事よかけ人が傍そばへも得寄

ぬ裏口の梅檀の木の下よ、山吹の花がたんと埋うつで有と思ふたれば目が
覺さめて、邊わたりを見れば此山吹、枕元まくらべも有たもふしき、銀がなほしや、夫の命助
ふ物と思ひ寐の夢よ誠まことにいない物と思ふて見ても心の迷まよひまよひ余所外で
へあしとし様の内うちノ裏うらの木の下を堀はづて迷まよひが晴はらしたい、聟きみの命みことよかし
る事堀はづして見せて下さんせと、いふよ在兵備胸そなへよぎつくり、あたれどお
いらぬ顔付がほみて、ハチとでもない夢咄ゆめとつし、何のあの木の下を堀はづたといふて
何が出よ、いらぬきもせいや、こふより、又外ほかよ思案しわんも有ふ、内うちへいんで
相談さうだんせい、いふこと、けふけふ何たる日やらくる人もく、七むつかしい夢咄ゆめとつし
ではつとたいくつ、そとや我等われらも奥おくへいて、よい夢見ゆめみよふと立たつをおさへ
て、娘むすめの事ことともかくも、自みづからが見た夢の吉よし左右善よしか悪あくかの返事が聞た
い、どこの女中めいこうがやまんがちな、ヨレとしさん聟きみや娘むすめの命みことづくこちから
いれずと木の下を堀はづて見せては下されず、夫程大事おほな事ことよさんやんすから

い、木の下よりはお前の心堀て見よやならんぞへへへへへ。こどやおかし
い、われが夢見たりやおれが心がゑる物が、こちらの女中も其通り、善か
悪か、見た者の心とつくり覺が有筈、あためんぞうなとふり切く
一間をさして入よける、跡よ二人が、花と花つき合しても玄ほれ枝水上
兼し其風情、秋篠へ思案を極め、おせんが傍よすり寄て、自ハ補正行が妻
秋篠といふ者、最前々の咄しを聞バ氣の毒、事ながらとも生らぬそ
つちの花、何と其山吹、わらひよ賣て下さらぬか、姫ごせの大事よ、討る
花といふ、めいくが殿より外へあい、其太切あ此山吹賣てくれど
おつ玄やるひ、此花のかわりよ立たい、花よ嵐といふ敵有て、散かし
る此菊よ、花形も似たる山吹故、夫で其花求めたい、すりや正行様のふ
命も、散かしる其譯を、一通り聞いてたべ、今度、四條繩手の合戦よ味方敗
軍、我夫の仰よへ在兵衛が智勇助といふ者、我よ似たると兼ての風聞、其

勇助と腹切せ、楠正行討死せしといふあらべ、敵を謀る一つの計畧かく
いへゝ正行が命惜むゝみたれ共、今某打果てゝ南朝の御爲ならず二つ
より太切の望有我體彼是以て大事の命、汝彼地へ尋行、勇助とやらんと
對面し、宜しく事を計へど、いやといへばぬ詞誥、夫故こそ此菊の夢よ
かこ付入來りし心のそもじの夫の命、貰ひよきた自がせつあい心を推
量し、どふぞ願ひを叶へてと涙よ、くれぐれ頼よぞ、おせん何の諾もあ
くすんと立て入んとす、袂よすがつてニ待た人ようかく大事を語ら
せ、返答もせずこゝやそこへ、大事やら小事やら、聞共いへぬ其咄
し、そちの男が太切な里やこちの殿御の猶太切、是々外の返事はないそ
こ放してとふり切袖、言出すからに覺悟の上、得心なければ其山吹、生
ては得こそ歸さじと、いふより早く菊の玄あへの拜打、合點と丁と受
たるかざしの、山吹互の夫よ譬し花散からぬ女房の手の内、同すいさん推參

あ下主女、花よりも其舌の根、たつて枝葉も用捨あく打べひらき、ひらけ
べ玄がらむ乱れ咲、花の受太刀花かいらぎ菊の匂ひと空薰^{そらだき}と顔も心も
取登^{のほ}し汗^{あせ}よせかるし紅粉白紛^{べふわいふん}とけて、流へ立田川、落花みぢんと打合た
り、勇助の最前よりはいり兼て覗ふ共内^{うち}より玄らす白菊の一里ん川^{一マイル}と落
入べば、はつと驚く秋篠^{あきしの}と勝色見するふせんが勇み、表の方より捕手の役
人、勇助めがけ取まけべ^{ヤア}こちの人勇助殿と、かけ出るふせんを隔る秋
篠、勇助のちつ共騒^{さわが}す^{ヤア}何科有て此狼藉^{らうせき}子細^{さい}聞んといふ間もあらせず
双方を捕たどかしる腕首握^{つかみ}身^みと覺あき此男、無躳^{むぢゆ}あ事をなさる」と手
向ひ致すと左右の腕逆^{かひなぎやく}み捻上突放^{ねねつけはな}せべ^{ヤア}物ないにせそ打据^{うちく}といひつ
つ頭上^{づじやう}を目宛^{あて}の十手^て、あぶあやと女房が、あせれど任せぬかせ杭のゆ
るがぬ勇助組子のめん^し、我組どめんと寄くるやつべら肩突^{かたつきあひ}頸突^{つきおの}胞^{つま}
返^{かへ}し、肘車^{かひぐるま}や腰車^{かたぐるま}片輪車^{かたわいぐるま}の片息^{かたいき}よ捕手もあやんで見へよける^{ヤア}某が命

左程ほしくべ、楠殿なぐりやと對面ながれの上うへ、さもあい内うちにいつかあいかなど、呼よひる
中より乗物立させ、志づく出る楠正行なぐまさだ、行義ぎょうぎ乱さぬ長上下おのこないづれも引
とせいする詞ことわざ、はつと諾うなづく家來より二人の女めのも争あらそひをやめて、様子ようしゆを窺うかが
ひむる、正行優美ゆうびの顔色がんしょくみて、某めのが下げ知ぢをも待まつず、家來が不骨ふくい我誤あやまちり、ま
つびら赦ゆるし下げされよと、土つちと兩手りょうしゆをつきし、も禮義正ただまく見みへければ、勇
助いすけも横手よこてを打うち、誤あやまちを以もつて誤あやまちとせざるはず愚者ぐしゃの常つね、夫めのも引かへ今いまのお詞ことわざ、人
をなつける仁智じんちの名將めいしよ、かゝる大將だいしよ有あながら人の和わせざる南朝なんぢの御有
様さま、是非ぜひもあき、天運てんうんやど悔くやみよ、項押こうお下げれば、正行なぐまさだもやし默然まくねんたりしがな、
町人まちにんながらも器量きりりょう有あ勇助ゆうすけ、自然じしんの後悔ごくわい尤至極よしとく、我わいやしくも南朝なんぢの御味
方ほうとして、計略肺腑けりやくひふくを碎くだといへ共力きょうりきなき味方めほうの敗軍はいぐん、先年大塔宮おおとうみやを助
奉たまる村上むらかみが心こころをまねび、敵てきを謀はらむる我わ方ほう便びん此謀ほらうをふこちあへん事全まつたく貴殿きでん
の心こころも有あ、委ましき子細こざいの先達せんたつて愚妻ぐさいを以もつて申越むか、有無あむの返答へんとう承うけらんと

異義を正してのべけれど、勇助ちつ共わるびれず、聊も楠家より扶助せられねば、恩もなく、元來義理になけれど共、只天恩より報ふ命成程進上仕らふ。すりや止得心下されうかべ、忝しくと悦ぶ始終を聞兼て女房かけ出。こちの人、そんあらとなた命をば、テ女の知た事じやない、何もかも胸よ有、夫でもお前、まだぬかすかと常から見せぬ白い歯よ返す詞も納戸よ志いぶきあむ三寶舅の聲見付られてハ事の妨萬事ハ後刻正行公と云捨一間へ走入、かく共しらず出くる親娘宛前からまだいなぬか表よござる。ほ大身よ、ちと密この用事有べ、其女中様を連奥へいけばて拵いけどいふよきりくいけど、呵れながらひつしょなく、そんならお出も顔で切暖簾の内へ入跡の秋篠も詞あくともよ納戸へ立て行、テきつい腹の立やうと、様子ハ何よりも白髪の親仁戸口よ立出、小腰をかゞめ御大身様と見うけ密々のお願ひ、恐れあがら暫く是へと思ひ入たる有様

よ正行も辭退なく、さづくと上座より、未對顔もあき某も願ひどり
何事と、詞より近く身を摺寄、數あらぬ者の詞取上給ふに仁心、其お心より
まへてのおねがひ、お聞届下されうか、身より應せし事あらば、有がた
しく、願ひとやすり餘の義あらず、憚あがら殿様のお命、や受たうござ
りますと、數から、突出す傍若無人、聞いて騒す詞を和らげ、世の中より太切な
命、なれ共又義よりつて捨る時、塵芥よりもからじ、品よりつたら我
命、望み任せ得せんが、命を望所存のいかよ、所存とすれ我等が聟、不
慮の口論相手を乞とめ、町人あれば兩成敗、身がたりのほしい最中、物か
げる見まするよ、年恰好といひ面頃迄、聟よりふよた殿様、何とぞお命下
さらば聟が命ひ助るお慈悲此上もあきに厚恩聞分て給ひれど、下から
いけど猫をかむ鼠小紋もはげ天窓疊より付押願、遠の正行當惑、返
答あければ猶も手をつけ、町人の身がたりよお大名様を立るといふ

逆様あ事ながらそこがお願ひ、其かへり又此親仁すだくよ切成共、一歩だめしよ殺し成共、ナウ、是程みやすますよいや共ふう共ふつゑやらぬれ、ほ仁脉^{じんば}よ似合ぬ、そりや卑怯^{ひきやう}あ、ほ大身^{だいしん}の命貰ひかける魂^{たま}のすへり様^{じやう}、遠^{とが}ふてござります、いやと有ても其座^の立せぬ覺悟^{かくご}有^{よる}と用意^{ようび}の一腰^{いつごう}ぬく手も見せず切付る、かいくゞつてヤア老人^{おじい}と逸徹^{いつてつ}とあしらふ正行せき立、在兵衛無二無三、ばたづく物音何事ど、驚きかけ出る二人の女、どくめ兼たる折からよ一間の内^{うち}聲高^{こう}く、舅^{おじ}の心堀當^{あらそ}しと、一つの箱^{たぶこ}を携^{たずさ}出る聟勇助、それ渡してハと取付^{じゆうつけ}舅拍子^{おじひやうし}よ蓋^{ふた}もさんらんし落^{おち}るハ旗^{はた}と錦^{しき}の卷物、正行目早く走寄一卷さつと押^{おさ}ひらき、見てハ悦び、讀でハ點^{とき}きみて、有がたし添し、日比の大願只今成就秋篠來れと引立く奥をめがけてかけ行跡、夫婦^{あきね}の鞠忙然^{ぱちぱん}と詞^{こと}もさらみなかりけり、在兵衛の物をもいひす立寄て旗卷物、勇助が前^{まへ}よ取直^{とがま}し置遙^{はるか}はがつて頭^{かぶ}をさげ、ほ父楠判官正

成公書殘されし自筆の一巻、家よ傳へる山吹流しの旗、拜見有正行公
と思がけなき一言を聞より夫婦又恵り、連合を正成様の子とい
合点が行ぬと様、今何をか包べき、誠楠判官正成公の胤正行君
といふい其勇助の事ぢやひやい、そぞや又そふして其譯れと尋る女
房押退突退舅が前よどつかと居すなり。某よ父もなく母もあく、生れ
素性ハ何國成とどへ共包此年月、合点行すと思ひし故こあたの所存を
さぐらん爲、覺なき科を拵へ女房よ志めし合せ、よつこら敷夢咄しも我
氏素性を志らん爲、誠正成の胤あらばとくともいひ聞せず、包隠せし所
存れいかよ、獅子の我子を谷へ授、其器量を斗るといふ、まして天下の
一大事ふろそかよ成がたし、元某ハ此宇治の里よ、細屋を營者なりしが、
ふしぎよも正成公の見出しう預り、名をも佐々目の憲法と成上つたる
身の冥加、其時君ハ東西あかぬ幼氣盛、我よも又一子有、年も相生似寄の

縁子、父君の目にとまり某を密かに召れ、汝が一子と此正行取かへて
育んと思ひも寄らぬに仰と、聞より勇助膝立直し、討死の武士の常一子
を残すい君への忠義、正成運つき討死せば、其時残せし駄をもり立、時節
を斗つて旗上せよと後の後迄見ぬいたる、父正成の詞で有ふが舅殿、
天晴黒星憲法が育上たる正行公、まつ其ごとく仰を受、に子を取かへ再
び元の染物や、色上玄たる憲法染と世々玄られたる紺屋の營、若君成
長の後の商賣止て武藝の指南、夜晝わかつたず教る内、一を聞いて万をえり
父君よ勞ぬに器量、ア嬉しや忝なやと悦ぶ光陰限り有、湊川よて正成公、
討死有しは最期の一念、只足利よどまると聞たる時の此親仁、身を八
つ裂みさかるし思ひ、推量有正行公と、忠義よ尖き憲法が涙肌骨を貫ぬ
けり、勇助無念の顔色みて、其時斯と見るならば父が冥途の先がけし、名
を後代よ残さん物、日本無双の名將を觀み持たるかいもあく素町人と

成下り一生埋れ朽ん事父への不孝此身の不運、是非もなやと齒を噛
えめ拳を握る計なれ、其心を知たる故是迄深く隠したり、父君の討死
の時、漸十三の李を残す亡君の後賢慮、今其時よりあたつたり、當時の執
事高の師泰、儕が我意よほこり天下を奪ふ催し有、其虛より隨ひ味方を集
め、京足利を一時より攻討、南朝の代となし給へ、亡君の冥途の悦び此上
の有べきか、片時も猶豫の所でなし早くも思し立給へど、進る親仁、六
十余病、名を顯へせし曲者を育上たる丈夫の魂娘といそく、それでさ
らりと氏素性、知たれ知たが奥の間の、正行が系圖書、それも覽せと一
間より投出す一卷押ひらき、こりや此卷物も父もかへらぬ同じ名の、
正行がなれの果、わられみ給へど押ひらく障子の内よねむるがごとき
死首い、最前の正行様、こひそもいかみとあされる娘、聟も舅も顔見合
せ只忙然たる斗ニ、秋篠漸涙を止め、それ其一卷こそ正成様、櫻井の宿

よて我夫々給へりしに遺狀。最前の巻物々割符を合す上からへや及
べぬ夫の身の上、何とぞ誠の正行公、行衛を求めんと心を碎く此年月、
宇治の里々似寄の人の有と聞もしやと夫婦入こんで無躰々命望し、
其身の素性を玄らん爲かく迄心を盡したる其甲斐有ては主人々、奉奉
る今日只今、此上々ながらへてハ眞途のお主へ義理立す、我首取て戦場
へ送り、楠正行討死せしと敵を謀る物ならば、跡々まします正行公へ方
便を残す一つの忠義といふを早く腹かき切、首討と仰が此世の暇乞
あへなき最期を計みて跡へ涙々むせかへれば、おせんも聞え悲しさの
余所外あらぬ此お首へ取かへし我駄、そちが爲ゆの兄じやひやい、勇
助の方便と玄らず身がたりみせん物と思ひ寄りしも我子故系圖へ則
此一巻、誠の正行贋の正行紺屋の息子と書残されし父君の心を埋んだ
證據の柴の下掘出した山吹流しも時々取ての旗上と長押の釘々打か

けく、憤なくんば此憲法主人へ忠義を立まいよ。子故々親の名を上の
よふ死だでかした、まだ名乗あひぬ共嫁女嘸悲しかろ、^マ私より憲法様
一生、親子の名乗もせず、所も多いよ親の内で死るといふり、よくく
よ因果あ親子夫婦じやど思へば悲しいくとくとき立く歎けばお
せんも俱涙、兄共玄らす妹共玄らぬ昔が戀しいと返らぬ事の悔泣あか
じと玄かむ憲法も胸み水きる瀧浪の岩み碎る思ひなり、勇助も心をな
つし、^ハ義成かあ、患成かな、あつたら敷若者生置ぬが殘念く、此上に最
期の存念いで晴させんと落たる刀、取より早く我黒髪根々ふつゝと押
切べ、憲法見るより氣をいらち、^ハ馬鹿く、玄い出家み成どり何のたれ
言敏達天皇の後胤楠判官正成の一子帶刀正行、敵がこひいか、命が惜い
か、見さげ果たる大腰ぬけ、^ハと歯がみをなして諫る詞^ヤおろかく、楠帶
刀正行の四條繩手の合戦^{カツゼン}よ、討死せしよ氣が付ぬか、我の氏なき紺屋の

息子形を替るも一つの方便今所を名々呼て宇治の常悦と改名し徒黨を集める印を見せんと以前の菊旗も持添つて立上る最前女が争ひの時又散たる菊の花水も入しひ即時の吉左右菊の則天子の紋水又花木を助ける徳有天子の紋を助ける水り楠が家も傳へる山吹流し今日も菊水も改め替る旗の紋軍の手始めさいさきよし姿ひいやしき町人なれ共一心父の脾肉をかり頼て天下を覆し亡正成の最期の存念晴さんれ此常悦が方寸も有らずちつ共氣遣ふ事なけれど辨舌さつぱり山吹流し始終をばたも菊水も染かひつたる細屋の息子因縁かくとおられたり常悦重て最前此家へ來りし折軒も巢をくふ燕一羽ならず二羽三羽ならび落しハふしぎの奇瑞漢の子房江又臨鷺鷺の水も恐るも氣を察し湖水をさがして玉璽を得るそれを以ておす時に燕の死せしハ此家の内も天子の傳旨か但又日月の旗か隠し有も疑ひあし包ず語り

聞されよと、未^あ前^{まへ}を見ぬく天眼通、憲法思^{おも}はず横手を打^た、天晴眼力奇代^{きだい}の大將門出の餞別せんとすんと立て納戸^{など}入、日月の簾うやく左く捧出^{さしゆつ}、最前^{まへ}もナセしごとく賤^{いや}しき我^わ、一大事をお頼有し父君^{ちちぐみ}のお詞^{こと}骨^{ほね}身^み通り忘^{うつ}がたく、何とぞ軍勢催促せんと心^{こころ}ははやれど四^{ひつ}夫^めの某^{ほの}誰か一八^は駄^は加^へる者^{もの}なく、とやせんかくやと肺肝^{はいかん}をくだく所^{ところ}足利侍従之助預り奉る日月のほ簾こそ、諸國の官軍集^{あつむ}る采配^{さいはい}奪^{だつ}ひ取^とんと身をやつし、忍び入たる室町の館^{やかた}念なふ盜取たる此簾、誠大將たる器量^{きりょう}を見ぬ内、中よたやすく渡さじと、思ふて扣へし其内^{うち}、驚き入たる今^のふ詞^{こと}、智仁勇^{ちにゆう}をそあへし名將憲法^{けんぽう}ごときが及ばぬ所^{ところ}、此簾を以て味方^{みわが}を招^きき亡^む君^{きみ}の吊^ひひ軍^{いくさ}南朝^{なんてう}の世となし給へと、渡す心も受取も義心^{ぎしん}を月日と磨^{みがき}の金^{かな}物^{もの}傍^{あわ}きらめく斗^{たたか}なり、娘悦^{はながは}べ結構^{けつかう}な大將^{だいじょう}を、アヤ殿様^{アヤ殿さま}も持たハ冥加^{めいが}ない添^{あわ}いと悦^えぶ程、秋篠様^{あきしのさま}のお歎^{なげ}がと、泣^{なみだ}をせいして大事^{おほ}の門出不吉^{ふきち}の泣^{なみだ}顔^{おもて}、嫁^{よめ}

や娘の此親が預かるも年寄役、此常悦は是を直と都へ立越、忍びくよ
徒黨を招かん、又秋篠より其死骸四條繩手へ送られよと、詞の下りかき
出る死出の送の四枚肩、恩地左五郎八尾半六、志貴の源八和田新兵衛い
づれもお家譜代の郎等、此上より弟の正儀様、お行衛尋心を合めでたふ
本意を遂給へ、といふも涙よ暮の鐘、宇治の川邊よ螢火の、こがるゝ夫の
口なしの井手の山吹みなし草、我の浮世を秋篠が切はらひ、切拂ふ千筋
の、黒髪血筋の妹、おんの泣よりあき骸を、此世の名残よたゞ一目、見やる
憲法すがるゝ娘、中をへだてる籬の菊の、榮を見せんかたゞといさめ
よなびく旗の紋、其名を天下よ染上しり、宇治の紺屋と菊水の流を、今よ
残しける

第三

秦の始皇の阿房宮うつす太夫の艶色よ梅花を咲す室町の屋敷を直ぐよ、

揚屋とし、禿小姓かぶる又花車家老、中居が揃そろへの紅梅襟、手先も雪の米、洗ひ、浮
次賀寸平酒のかんほうらく頭巾づきんのほ大將、手づから料理のほ、掠こじらへ、實大
名の力よい富士の山さへ逆様ひじょう、きりく廻る大摺鉢すり鉢、すりこ木からり
と、投捨給ひなげ玄げんをやく、次野がすつきりよふ持ぬ故ゆゑすり鉢めが逃
あるき、侍従之助が心こころよ任せず肩かたがつかへたアイタくソレほ典藥の山明道伯、
そこそやく、道伯が針はりでつぬよ直まつた事ことがない、按摩あんま共ともが苦手くるまより、や
つはり太夫の甘草手かんぞうて、ぬぐふてくれる伽羅きらの汗釋迦あせしゃかよりも利きがよい、ほ
んよけうといふ物好持付すきぬ庖丁はうちょうでもちつとでわたしも小指ちびを、いつ
それがよ切たら、序じでよ起請きしやうをくれるで有ふみ、又殿様の起請書きしやうしょよふな中
かいな、ことをやお道理いろ、寸平きつと滋味方、玉川様の帶の悦ひ夕部から俄そは
餅搗もちつきやら、殿様の料理人やら、ヨリヤ又どうしたほ趣向しょくこう玄げんや、身みえいれる程
みもないやつ、ヨリヤやい折角せつかく太夫を身受うけしても窮屈きゅうくつな家中のやつら身みが

前へ無用と云付廓の者共取寄て下々の女夫の眞似ふろせが咄で委し
う覺た、向後我等こちの人、囁嬉しいかどに祝在智根、そちらぬからぬけふの
祝ひ、祝言も一時よ千秋万歳の玉川様よ奉る、此蓬萊の松竹千代と
さ、こゑやくく、やつどさ、奴踊やつこおどり、揃ひの手拍子ひやうち、は家老石堂の家來
歩藏太義ハイ、旦那の差圖さしふで、お慰あさまみはへぬきの奴踊やつこおどり、さらば是から祝ひ
の餅、奴が一臼仕らん、臼取いのきの女中の役まき、我等どもやよかまへ、わいら
が踊で身が餅搗、拍子を合てはやせろよいさやつとせい、タイく、よい
殿様の壽ことよきよ、大黒舞こくまいを見さいな福大黒見さいな、大黒く大黒とやく、角
前髪の昔より器量きりやうよしなお人で、あちらの女中よちよこく、こちらの
女中よちよこく、方々でぬれる逆玉川よ身を玄づめ、それで色が深い
れ、面倒な邪魔じやま大黒で餅搗が臼すう成た、どつどといけれど門の口ぐち奥
様でござりますか、免めんくと十面引かへ三面を、ぬがせば姥おきこが懷いだみ、抱

ていたいけ石堂が蝶か花石愛盛、母のよせ浪姫共打連御前より出でける。
アハ家老の奥方當世く、鉄か石かといふ石堂、我等へ忠義と思へば乙
そ、此やしきを廓よして色共を取寄させ、女房や家來の歩藏迄よたいこ
を持せ、身が心を慰よきたか、今日のひ祝ひぬめでたゞ存ます、夫石堂の
義證公お召で參られ、名代のよせ浪がお悦び、此駒の石堂殿と二人が
中の花石とて今年四ツ、まだ乳離れも致しませねど、殿様へおめ見への
の大黒乳母こちへ、我君様へお禮くと辞義にさしてもぐれんせなふ
伯父様抱てと手を出すヨレく、伯父様と勿体ない慮外者めが、大事な
い人ふめせぬ器量者爰へく、白い大黒玄や、そして目付の悪性らし
さ、成人の後の身が片腕よ成そふあやつ、大黒の文字ハ大きよ黒い、おれ
を粹じやといふ心趣向とふもいへぬ、天竺みてひまかきやらく、我朝
みてひふ乳母殿の本尊大已貴の命く、太夫見や、石堂が堅い顔してこん

あ物産しおつた、さつてもかへいらしによいお子や伯母だかよも抱れて下さんせ。^同よせ浪様とやら賤しい流の私が、どみした縁でか勿躰もつたいあい、殿様のお情受めうが、冥加めいが志らずとふよくしみ、堪忍かんしんあされて下さりませ、わつけもあり殿様の御寵愛ちやうあいの、お前まへわわたしがお主様、お目かけられて下さりませと正月詞じんじつも眞實心しんじゆ、そぐひぬ出合しゆあい時ならぬ牡丹ばななの花と水仙花、一つ生し風情ふうけいへ、京都の管領細川頼之の家臣刎川主膳しらがわしゆぜん、賢者けんしゃよ仕ふる仁義の武士上下揃そろひし男一疋、伴ひ歸るかへる當家の執權石堂勘解由庭意かげゆぢゆの、知ぬ打解顏たけいん、殿の遊興言付置ゆうこうごんぶつけいよ志られた座敷、女原、酒肴琴三味線さかなこじんさんみせんで、お慰めさいげく、と放埒はうらつの腰押家老の下心しもごころ、やつと呑込刎川主膳しらがわしゆぜん、今日大將の御所ごしょよおいて、侍従之助殿御身持うしよの磯義詮公いりの上聞よんよ達せぬ内密ひそかよ吟味致さんと、後程兩管領の名代として、山名軍太夫桃井兵部參らるる筈拙者はずせうしゃよも余所ながら様子を見よど、主人頼之より付しが、お家の執權しづけん

石堂殿、最前御所みてやされた所、又只今のば一言、殿より遊興をすしめ、酒宴乱舞でお慰やすらしに驚いた御忠心と當こすつたる、詞の端聞て氣の毒額どくひだひより寄浪よせなみ此諫言かんげんの私共がヤ咎と思ふても女の事、夫の心へ定て深い了簡れうけん有ての事と思へ共おなまヤ歩藏ゆきくら面白そふおもしろふもつつき止やがぬかす平殿へいでんも近習きんじゅ勸うながながら、ちとは異見よみも立たがよい、ヤく女房、何を小指さしだ出た、何事も此石堂が胸むねより有、主膳しゆぜん身が殿の指圖しゆずお身より頼たのまぬ、殿よりお構おなまひなされずと、奥の間で酒宴しゆえんく、遠とおい我家來の石堂、家老の異見よみあとと、古い事ことの煤掃まいはきにてすつペり寸平すんぺい、此土器ちどき、次野したのが酌しゃくで呑かけふ、やり手も花車はなも皆こい／＼と、入給いりきゅう下地しもじの浮次うきす賀が意いいよし、浮うきぬ心こころもお主風かぜたつよせ浪なみが物思ものおもひ、他人ほかひとよかしる刎川はねもよがり切きたる折ほりからよ小姓わらわ香川かがわ主馬しゆま之助主人の前まへ手てをつかへ、奥様おくさま口上くちじょう、其方そのかた用もちお仕廻しつまわならべ、只今お歸かへりあされませいと、迎むかのふ使つかといへせも立たず扇おうぎのむ

ね打さうくく、打ふせくはつたどよらみ、儕身が手廻りよ育、武士の法へ來りつらん、今日身共が參つたれ太切の公用、女の愛よ引れて、公用を嗣へ放埒武士、暨主人が放埒成共、諫言もすべき儕が俱々よ踊狂ひ、今又も山名桃井が來つて、ケ様の事を聞べ身の浮沈、主人の大事よ成しと知つゝ放埒を勧る、こな不忠者めが、うぬくよつといやつ、仕様の有やつなれど今へいれぬ腕がはがゆいくと、勘解由を尻目の折檻よ思ひがけあき不調法誤り入たる主馬之助、髭もみ上げ、見むかぬ石堂、歩藏駒下駄、ナと立寄直す手を引、たくつて丁くく、お旦那是れ、是れとひうぬ推參者、儕も身が扶持をくるれば武士の端くれ、正しく身共よ恨有其頬付、云分あらばあせ引ぬいても切付す、卑怯自恥な尻目よかけてのつぶやき事、なんとして直より得いふまい彼禦の七年物を、廿日鼠が念がけても、鯉よ恐れて得飛付す、脇からそつと手を出して引こめ人音が

するところへと遡てはいる、てうど其通り、忠も不忠もまざかの
時代、ちうの聲も上るまい、かう辱はずしめられて、儕も立まじ、一腰でもさ
いた役目、折を見合せ誰といふ遠慮はない、眞二ツ又合点か、とつくりと
思案を極め、後程でも、只今でも、尋常じんじやうよぶち放して、辭憤じぶんをばらしむろ、ふ
と詞のはがね胸むね、渡たして奥おくよ入、事を破らぬ堪忍かんにん、却て強き誠の武
士、邪智じやちを含む主命ぬしめいを呑込奴のぶこがとほけた顔おもて、こりや何の事だ、譯わけもいひず
みぶち擲なげき、いつそ隙あまでもくれべいか、聞切て出てくれふと、様ようへのさく
懷手いは、けがのふりして刎川はねが膝ひざ、よぐりつたり、こりやまつびら、辭義じぎする
顔で抜かくる柄つかをおさへて動かせず、後へぬつと突出す鎗やり、左ほ首腕うで首
玄くわつかと捕へ、こりぬ奴のが鼻はの前まへ、ひらりと見せる刀の光り命からぐ
逃たか歩藏かち逃おしてやりの曲者くせを、引出す、頬ほほ近習きんじゆの寸平、逃おしも立すと
ふと打付うち、主馬之助捕繩とりつな、是用意きよてんと氣轉きそんの下緒さがみ、聲立させじと捨込すてこみ

わら裏門口よ覗ふ編笠折こそよけれと塙よ手をひらりと忍びこも僧
の有といいかで主馬之助の表門怪しき者の討て捨よ畏つたとかけ出
す血氣の逸足引違へ山名桃井參上と玄らする聲々心得たり詮義の種
と寸平を取て引立一間よ投込騒ぬ侍さひぎの座敷奥いたいこの千鳥
足立も立れぬよせ浪よ引すられてもいやじや一桃井との酒の名か、
山名でも嫁菜よめなでも、一口もいけぬ頬侍の身が嫌ひ、あせく、とつこと
聲、是でないかぬと見て取剣川ほねよせ浪殿悪い合点、殿のお嫌ひな者
えあひそふどり、そぞや不忠といふ物さ、そふ玄や中々貴殿聞分のよ
い男、是の意共覺ぬ拙者迎むかひしやうら内證うちぢで、深編笠ふかみがさで出口の柳か、是のもて
る、色が有か、有段か、誰じやく、とおつ玄やつてひよされぬ近日緩りと
ひ供く、夫よ付て拙者が存付た趣向しゆこう有じや、聞たいのく、サ今日山名
桃井がくるにてつきり殿のひ秘藏ひぎざを見ようせる下心所でおてきの顔

を見せず、和らかいと思ふ殿が、四角四面めんよ堅かたふ玄げんて見せると、きやつら
が坪ひらへぐらと違ちがふ、所をつかまへ酒さけみする此趣向じゅくこうへ、きやうといへ
氣き入いた、どつと刎川はりかわ、そんあら此ありで、逢むれぬ、鳥帽子とりぼし素袍すはら持もてこい
サア、ちやつとく、シ寄浪殿よしろうでん、手早てはやみぬがす長羽織ながはおりほうろく頭巾引
たくり二人が、心引立こころひきだつ鳥帽子とりぼし、素袍すはら取とて着きせ参さんらせ、袴はかまの着きてあしさひやか
よ折目正たたずましき角つのひしも、忽すこかにる裝束しうつぞく、あんぼ醉おひひても忘なつれぬ故實ことじつ生おきれ
付つたる万石取ばんせきとり、とり課おほせたる刎川はりかわがはづす次の間表まんびょうの方、入いくる使者ししゃ
分別盛ぶんべつきざり、詮義ねんぎすべしと蚤取眼ねこりせん、傾城買きらかいかい、慰なぐされるど、夢ゆめも白髮しらがの軍太夫
兵部ひょうぶ諸共打通あつとおれべ、素袍すはらの袂たぶやかみ、一別以來珍じんらし、兩人りんにん、氏滿じみつ
直ただよ見參みさんせんいざこなたへと手てを取とて、上座じょうざよ直ただし遙はるかさがつて平伏へいふくあ
れべ、是これ我々われわれよ何故なぜの禮義れいぎ、酒興しゅきでござるかと立た寄よばざ、寄よま
いく、今此禮義れいぎの義詮公ぎせんこうを敬うやまつふ所存あるところ、元來とき某もし一滴ひとしづきも酒さけをたべねば、傍そば

寄てもかざへせぬぞ、殊々以て色酒などり某が大禁物、音も聞ん我身持の堅き事、二月時分の餅みひとしく、譬目の前よいか成美女がびらついても、びつく共せぬ大丈夫おやうぶ、穢けがられしと酒がいりする馬鹿懸懃ばかげん、どと、志らぬ、山名桃井、顔見合てお聞なされたか、さればく、物の見ると聞きと、案の外あるに心腹、見れば見る程目の中のすごさ、威有て猛きに骨柄こうがら、と目のすつたも思ひなし、名大將のお盃頂戴仰付られかし、さうしくもすされたる、望み任せ盃はうち、と蓬萊の大土器はうらい、かは寄浪よなが酌しゃくで一つ、やは前まへの酒が禁物で、ひざりませぬか、玄やといふて是がまあどふ堪忍かんにんがなる物ぞ、チット一つ、二つと、手を持そへて七合入、こすく一ぱい息なし呑の、呑口上をひねつた跡でけふどうのめるぞ、こゝや最一つ、浮世の酒玄やさうつけく、と引受く、寄浪よな寮子持でなければ只ただ置おきぬ、膝ひざなどかまやと、やつころり、直ひきの高なしみれん、一人の使者が二度洟ひづり、ゑつ

ぼよ入たる石堂勘解由のつるのさべり侍従之助を様もはたと蹴落し
たりはつと驚寄浪が玉ざる玉川まろび出ふ怪家けいがあいかと介抱も酒
正脉なまたひいあさ付ふ薬も泣ばかりに兩人はらうじたか侍従之助が
體からだい酒と傾城が喰て仕廻はらわ腸はらわたいほうがら石堂是迄手をかへ品をかへ諫かん
言げんすれ共聞入なく却かへつて我を歎みあす大馬鹿拙者じつけ偽りゆさぬ證據廊しおうこうるわ
者共爰よべと呼つぐ草履取やり手引舟あんじやいあと乞こごともな
まめき立出る足利義詮公御家門の御館揚屋あけ又玄さなたゞわけ者侍従之助
をぼいまくつて外の跡目を立るが忠義、義詮公への御前へ俄そわかの病死
と宜よろしう御披露ひろう、こりや尤、主の恥を隠して沙汰さたあしよ追拂はらはふの上分
別と、即泰一味の山名が相撲奇浪驚キアあんと侍従之助様を追放玄さなて忠
義と、女めの玄さなつたる事でないごくどうな殿をぼい出し家を立るが
親殿への忠義傾城めにかけ罷かまひあいやつ、廊くらはへ戻して親方が心任せ其

義の刎川主膳、申付んとすつと出、島原の玉川が親方それへ出い、ケ様の事もあらんかと主人頼之の御内意、遊女なれ共玉川が腹よい殿の胤を懷胎と聞及ぶ、産落す迄ハ親方へお預あされ、管領頼之殿より附人を付らるゝ大切の預り者、虚事あらべ急度曲事、罷立といがまぬ政道迷惑す。預り者でもせう事が、泣ても濟ぬザ、ふじやと手を取くつわや歩藏が^開馬鹿殿も立れいと、引立れ共ひよろく、太夫どこみと廻らぬ舌、爰よどいふ口とゞむるくつわ、追立て行後かげ見送る、我身ハ思ひの思ひ、巷も六ツの王川が、哥よも詠れぬ流の配所島原へこそ歸りけれ、石堂殿潔白なあされやうシテ其元の方よ、跡目よお立なさるべき成人の若殿ハ、ござる共く、則是よと乳母が抱し我子の花石、上座よ直し敬ふ貳、女房はつとかけ寄を後よかさへて物いへさす侍従之助殿妾の腹よ出生の若殿、何とよい跡目でござらふがな、御成長迄ハ石堂が方よ暫く預り

奉らん御両所宜しく、義詮君へ跡目相續のひ願ひ、孰成頼存ると、我子と
兩手をつくべし、呑込主膳同成程く、是で大方合点が參つた、貴殿の前
でたつた今、詮義致すやつが有、に覽らんあされど、一間の帳ひらりと見せる
繩付びづく、惄り石堂あむ三寶、何とせんかた長押なげしの鎗得たりと後へ刎川が、
同く落たる鎗と鎗、かつしと互の一生懸命、結びあひたる穗先はさみと穗先中
おてうど切折たる姿おもてにも僧何やつと驚目先へ投出す首サマ、詮義の手
がよりをと、いふ間も稻妻いなづま二つの穗先、取より早く逃失たり、そつこいやら
ぬとかけ出す鎗、玄こしつかと取て、サア刎川、科人を引出し、身が前で詮義せい
キ夫キハ、それハどハあせ猶豫ゆうよする、但何も詮義ハないか、子細なければ彌
若殿、ほ兩所ほ前をお頼ねがす、委ま組せき承うけ知仕しる、ほ苦勞くらう千万、主膳、太義とほくそ
づくみすし、知たる、謀叛人ほんばんじん證據しじきなければ刎川の、羽はをもがれしはやぶ
さや、妻めの夫の惡心おごを、それと白ふもいれぬ、是も子ゆへの、夜の鶴玄

はれ、よらんで「歸りける君よ命を奉り君よ命を養る實侍の身の守、石堂
勘解由いかなれば氏満殿を追失ひ家の政道心の儘、おのが館の闊計花
慶、主の難義い余所を見て時世よつれし人心、秋よ忘ほるゝ中庭の木の
葉斗ぞ忠義よ、不義よ榮ふる一子花石義詮公へに目見へ首尾よく調
ふおめでたゞ諸方の進上たへ間あく使者の出入の所せき、箒目立る土
地もなし、衣笠調合出がさ新五右衛門ゆまさるする先以て此間は、若殿跡目は相續はづき悦
びの印迄と何が白木の折櫃物、受取間もあく三嶋六藏こじまよしこ毒、折紙の刀箱
つゞいて杉岡五左衛門、山内勝之助おさむと思ひくの進上物、何れも同じ
使の口上ことじょう必頭がしらの夕露が帳面扣ちやうめんひかへ一々よ、筆も汗かくいそがしさ、さう皆
次の間へ片付て置忘やんせ、奥様へ此帳面、お目よかけたゞや夫おおむで濟毎
日か家中の付届とづけめでたい事じやあいかいのめでたい段か和子様
の出世いどしい侍従之助様、色故いろゆゑ云ながら我家來よ追出され、

「そんな事いへぬ物、何よもえらすと發才のふ鉢、且那様の耳へ入たら、大抵の事じや有まいぞや、何のいな呵えやんしたら大事か退出して仕廻ふ分、ほんよ此内方よも且那様があけりや、勤よいお屋敷玄やど何の苦もあり下女婢渡り奉公のならひしや、爰斗日が照平と、浮世を一分一文奴、踏ちらす庭石堂が、屋敷へのさく入来る、跡よ引添丹助莫内ばく下りおらぬか、うぬつるよ見えらぬ二才め、とつから出さつておらがたつた今掃ちぎつた、庭の飛石泥脚はきづのでのさびり上る、ほどを持って引出すべいかマサすてつべいぶちめけろと、わめく頤おどがじうりと見てハチ何ぼ達者しらべよたしいても、お身達もおらも、知て有切米二才でもあい只一菜の赤鰯あかわし、達ぬ魂たましひ石堂殿いわ慈悲深い旦那殿じょと、聞及んでたつた今、奉公よ出た新奴、案内不骨じゆハ歟わしてくりやれさ、何さ奉公よ出た、品よよつて傍董はうとうよしてやんべいがなまぬるいけちな類、傍ひ新參おらひ古參じき式日の草履くきの取やうから、體ひ

の作り様迄もお家の風義かみの格別べつ、今から引廻してやるべいま丹助そふ
だく、何もかも敵むしてやらふ、先水の打やうまつこう打手うちてを乞こつかと
取ゲッ待またト、それをかけて貰うふては、目見みへ衣裝きよがだいなし仕舞しづ、おらが今
迄覺おもたはは、かう打と二人よぎんふり、あたまひやして乞こゆらもやし、無
念の奉じよしぐつと捺ねぢ胸むねぐら取せて首筋攔つかな、押付おしられてべつたり尻餅しりもち、ひつ付
體からだを双方さうほうへほんと蹴けられた鷹たかの爪つめ、番椒ばんとういらすすひりつくは、奴うりが尻しりの
恥はずさらし、業ごくさらして、すつ込跡こいつ、後あとよ立て、最前まへの奴うりが手並てなみ見た奴うり、新
參あらの二才にさいよつぼと骨ほねが有あて面白いおもしろいおれが出だすが成なまないと腕撫わでなでさす
るうかめ顔ごりややい、此屋敷このやしきへくる奉公人まつこうじんと、いつでも此步藏かずらが吟味ぎんみ
して、腕うでためし玄こゑて見みねば、拘かゝぬ試こうみ先まへかう致いたそふわい、さつてもよい腰こし、何なん
としてお前まへの叶はぬ、といふてかう參まつらふ、そつこいそふそと攔合はらふ、腕うで
も黑白石堂しろくろせきどうが、庭にわの勝負かぶの先手後手せんし、指込中手しのこを入いぬ關せき、玄こゑがらむ兩足竹

の節一息つく間を先取歩藏切込拔身をまつかせ手桶ハ秘密の奥若殿
それへ出と呼ひる聲、なむ三寶、乞かけた喧嘩引すべ成まし、勝負ハ後
よ、奴部屋も待ておれ、サアひけ、くと拔身を鞘立別れしが、ヨリヤイ待傍輩
ユ成た歩藏が、寸志の音物受ておけとはつしと小柄を柄でとめ其手で
れ参らぬ、お志ハ受ました、よい後迄持しちや置ぬ、首と一所ム取戻す、
そりや其方の腕次第、後よさらばと劣ず負す、釘さす釘貫、奴と奴つがふ
て別るゝ口と口、奥々出る花石の石をも玉の若君と、欺く露の鉢乗物、乳
母のお香も養君も、つれて果報も相興の、手ぐりも昇出す、嬢共、我子なが
らも主あしらひ寄浪慾慾も手をつかへ、若殿様へナ上ます、此程跡目相
續のほ目見へも相叶ひ、今日ハああたらお召みて奴出仕、最早殿のふ
詞のお家の捷今迄の様も、やんちやおつ乞やつてハ政道が立ぬ、必不行
義遊ばずある、そとや慮外あがら乳母が付てふりまする、サア今お教す

た通りおつぢやれど、乳が指圖さしよ、愛らしく、皆すつといてこふぞよと、廻らぬ舌したよ余念なく、アさすが道みちの家いえの若殿様わたくしさま、有あがたい御上意ごじょうぎと譽ほむる下したから乳ちいのま呑のみふ、シレお乳母殿ちづくひざん乳召りめし上あられうと御上意ごじょうぎじや、又もや御意ごじのかへらぬ中なか、乗物參まいれまい、こりや誰だか手車てぐるまお乳母殿ちづくひざんの手車てぐるま、さしめきてこそ出でよけれ、タタ露あけけふのお召めしは何事なんじかかへえらね共とも、大方若殿御おおがわたくしさま知行ちぎょうの御加增ごかぞうか、猶此よし上の御出世筋ごしゆせきと夫めの悦うれび、是これといふも此頃奥おくよ勸請くわんじやう申弓矢ゆみのや神じんのおかけ、追付若殿おさがりわらべ諸方よろづよりの進上物しんじょうもの、神じんの御前ごぜんへ御備ごびへ申家内殘さんらず千秋樂せんしゅらく、九獻こくげんの用意ようびと夕露ゆづの、庭ばの切戸きりどよ下部したぶが手てをつき、只今若殿様わたくしさまの、お乗物おのりものへ御訴訟ごそせうの者ものと申まことて、女一人付つづて参まつる、供前ごぜんの願ひ叶かなぬお屋敷やしきへ參まつれと申まことて、引連是迄罷歸いたゞきはいるど、いふ下道したぢの薦おんかづらそれより細ほそき女氣めのけい、實じつもつばなの頬ほほかぶり顔おもての涙なみだ、埋うずくもれて、時雨しぐれの中なかの臘月おはづき、宿やどかり兼まことにる風情ふうけいあり、人目ひとめを包いむ訴訟そせう人ひと、願ねがひの品ものも大方おおがくあれど、

振袖のつまらぬ末の若氣の約束、顯られた千束の文、つかくと此屋敷へ、身の科隠す頬かぶり上を欺く慮外者無得心な人よ見咎られて、結句身の大事よ、ならぬ様よ此顎ひ取上ぬ歸れく歸つてど却て慈悲をどうよくよそよ白洲へ他人向へ、尤なふさばされどお目よからつて直くよ、お願ひやさであらぬ譯、此訴訟の幾重よも一重よ包む顔の絹、其頬かぶり取て、猶以て赦されぬ立たくと立て行のふ待て下さんせど、志んみの様の端よ手を禰の裾よすがり付、赦されぬといふ腹立、重々道理今更よ面目あいは對面と、様かし様よいちいさい時お別れや、兄様ハ男の事行義作法縫針より、手あらひ香のきやう迄女手業の一通り、教て貰ふた寄浪様、其大恩を無よあして、氣儘よ持た身の徒、あんまりよ分がなさよ、これた此顎、押のごふて參りしひ、屋敷へ戻りたいで、あいたつた一言、兄様の勘當赦すといふお詞、聞て其儘志ぬ

覺悟此訴訟をコレヤ穢れしとも思ふが、わ玄や母様と思ふて居る
お慈悲くと計みて伏拜む手を玄つと取千束様、お前の勘當の訴訟な
ら、そちからお頼みされいでも、身よかへても致さいでけふお出ある
れたれ勘當の詫とい偽り、夫石堂を勘當玄みござん玄やうがの、
お隠しあはれな、無理とい思ひぬ、是程道理な事へあい、聞へぬれ我夫す
ぐちがゑくぼといふたとへ、是迄あんあ心の人と、思ひも寄ぬ大惡人忠
臣顔よ侍従之助様退出し、我子を殿の胤と家を奪ふ謀叛の玄だら、聞
玄やんしたら腹が立等、お前の勘當赦すやいなや、直よおまへが、お果あ
された爺よかひつて、石堂殿や私共迄は勘當、それも何故、花石といふ
子があくべ、あの悪心も出まいもの、ひよんな種を身よやどし夫を勘當
さするのみ皆わたしが悪いから、男の妻からと何か又付すだく、
切たがる、此身いどりぬ悪人で、夫よ悪名付るが悲しい、兄弟の縁り、

切れもせう、子といふかせりのやうよ、切ても切れぬ夫婦の縁叶ゆづれの肉
迄も異見けん玄て、どふぞひるがへさせませう、千束様、勘當かんとう赦ゆるして下さりま
せ、今生のこんじやうお慈悲ひじぞやと、手を合せたる互の胸もつた、勿なき軀軀あい兄様おにさまよ何の勘當かんとう
する物ぞ、其疑ひひを受うけるのも思へば他人の始はじりと、譬たとへがつらつらい恥はずかしい、
誠まこといものとの兄弟いとこよ、成て異見けんをせう計く、おまへをわたしがちから草くさ一所
よ成ていふた上聞入じょうもんにゅうあくば目の前で、直す直よ二人ふたりが指違さしちがへて、ほんよお前
も其心こころか、わたしも、わしもと小姑しょうご、兄嫁おとぎよ中の睦むつまつじよ、涙なみだあくてぞ見みまほし
し、まアこふ心こころがあふからひげふの日ひ過すぎすまい、夫の顔色おもていろ見合せて、よい
時分ときよ呼よふ程ほどよ、口の間あいだよ待まつて下さんせ、追付おづけかふく耳みみよ口くちさし寄浪よなみ
ハ奥おくの間あいだの、襖引立切戸口ふなげりだきてぐち、窺くわふ照平てるひらとふじやく、善か悪か、兄様おにさまハ惡おご、兄
嫁めいの心こころハ水晶すいしょうイヤ、其水晶すいしょうよも合点あいてんが行ゆく、曇くもて有か照平てるひらが、おと骨骨おる
へて一詮義せんぎと、かけ行帶ゆきをよ待まつた寄浪様よなみさまよつがふた詞こと、一時いち待まつて下さん

せ命を捨て二人が異見直らぬ時のためせぬ。さふんごんで勘解由が
首夫婦の縁も一ヶ所も切そりやどふからぬ覺悟の前善人として見せま
せう。待て居るぞと詞説、女夫の中も色だつ表、は上使へと聲高々慥よい
ふてゝ見あがらも兄の心へ白紙一重ちからあくく、別れ入、かくと聞
より館の主石堂勘解由出向へば、出来る上使の其勿躰、匹夫の中も出な
がら新よ興す宇治の常悦貴人高位を我家來と優ある氣象長榜さう亦
く上座よつと通る、いぶかしあがら謹で足利のは前よ參勤の諸歴々我
等存せぬといふ方あし、つるよ是迄見受ぬは上使、は姓名へと尋れば拙
者、宇治の常悦とア、今月今日のたつた今、軍術を立と有付た新参者、ハテ
其新参者が義詮公のは上使の趣承へらん、サトメ其子細といつば、謀叛人の
詮義と參つた、玄て其謀叛人との何者、則石堂勘解由といふ、謀叛人の
詮義へと事もなげよいひけれど、此石堂公のは不審蒙るべき謂な

し、それで上使の化の皮が、顯られ渡る宇治の常悦、今日若殿、義詮公を召、其に留主共立ちすみ來たる汝が天罰アマツ真すぐと子細をさせと詰かくれべアヤサおせきなされあいか程陳じめされても其元の寶道具是又有と指出すハ勘解由が覺の館の穗先ハシスカタ悔りさしもの勢ひも切先折て思案の體アソブ其元の心の底ハコ、此館が委細存じてゐるすでに切先顯れんとせし所證人の玄波首シヤウボ切た寸志センシ身も一物万一千誠の上使來つて詮議の時、此穗先が邊ヘンの手ハンド戻つてなくハシツ潔白セツハク言譯イヒワケが成まいし受取めさと投出せば、扱ハンド先日の功を云立ハラフ、身ハム拘ハシベられ來りしあ、汝を拘ハシベ來たれい去ながら、此常悦を家來ハシメ持ハサフ百万騎ヒヤウの味方と思へ、又主人ハシメもたば日本一人の某、後程迄ハシメ汝が心中窺ハシメひ見て上の事、勘解由後刻と立上り、人を人共思ハシメぬ大膽離家ハシメこそ通りけれ、跡ハシメ石堂手を拱ハシメき、我を探る弓曲者アソクセ威風骨病アマツコウガル只者ならず、ハテ心得すと眉ハシメ皺ハシメ寄浪立出、

コレヤ石堂殿心得ぬとおつたやるお前の心わたしにどんと心得ぬ侍従之助様を追出ししわの我子の花石をどいふ口おさへて同シだわけ者めそれを仮かうよも口ばしるかイヤくや是ばつかりひいねべあらぬナ推參者異見聞けんぬぞ今日花石を召れし出世の第一我本望成就じやうじゆの時此箱の中なかへ若殿の公装束はれしやうぞく神前じんぜん又直し武運ぶうんを祈いのれ早くくわくといふ間まをあく若殿歸館きくわんとのしめく聲花石はないし足あしとりをまだ忘うつどけあき稚子わらわの前後まへうしろを取とまく飛道具ひぐう弓ゆみと矢や番ばんしわらくれ武士士官跡押じきおへハ劍川主膳じゅせんさを嚴重げいりなる警けい固この有様寄浪ひよ拘くわり何故若殿様わせんさまをとかけ寄だきて抱いだきめくコレヤ主膳様此稚わざわい殿様わせんさまよ侍衆ししゆが弓ゆみと矢やつがひひよ子供こどもおどしてお樂たのしみか但子細しきの有事ごかお聞きせあされ下くだされどせかぬ顔おほでを女の胸むね聲こゑよ走はしらるる氣づかひさく不審ふしん尤尤マヤこれ石堂殿せきとうだん貴殿きでん主人の家いえ預より置おきる日月ひげつの旗はた此比南朝ひなんしやうの手てよ渡わたり是これを以て軍勢ぐんせい催促さいそくすると諸國しょくこくの訴うつたへ預よりの旗はた

敵方へ渡せしゝ謀叛人の科遁れず、其預り主ひ當家の跡目相續せしゝ
其花石稚おさなけれ共謀叛人矢ぶすまを以て警固けいごせしゝ仰あおそ敷のぞを思おもはれん
が天下の大法皆引くゝ則右の科よつて花石より切腹仰付らるゝと
聞て女房氣きハ半乱はんらん何此子こス腹はらを腹切せとの上意じょうぎかど目めよはらく
涙聲なみわ石堂殿せきとうでん天罰てんばつ思おもひ玄げんらら玄げんららしたか主ぬしよ敵てきたふ非道ひどうの出世しゆせいが何
の思ふやうよなうぞいのこ聞きへませぬぬつれないぞやといふ物ものの悉
ふぞまあよい分別ぶべつあいかいのこかきませ歎たんよ目めもかけず上使じょうし
苦勞くらう千万、女房今渡した箱はこを是これへ何玄げんややら利口りこうそふよ出世しゆせいとの何
の爲ための公装束はれいじゆと、ぐらりとほふれば稚子おさむすの淺黃あさぎ上下九寸五分ヤハこゑ
や死装束、是を出世の公服はれいふくと、それを着て腹切はらきりが、花石が出世玄げんや
い、といへくいかよ驚おどろく妻め、刎川主はりかわぬし膳ぜんつしと差寄さしおき石堂殿せきとうでん寵愛ちやうあいの子こ
急切ききつ腹はらよ相極さまごり、嘸さざれに本望ほんぼうでござらふの、ハッタ推量すいりょう下おろされい去はなる元弘げんこうの

春はからず夜討の騒動さうどう、口惜や、何者か忍び入、錦のに旗行方なし、必定南朝の手ひ渡らば、讒者じざの舌した、侍従之助殿しゆでんに切腹きつぱくの目の前と心を碎き子細こまめいはずかやうし、みなされよと放擯ほうひんをすしめ、勿躰もつたいなくも土足どぞくにかけて追出し、猝せがれを若殿わくだに志たればこそ、ほ主人の命みことのめいと別條べつじょうあり、念願違ねんがんたがはず花石はないし、切腹仰付ぎやくこうふられし、天道此石堂しそうじやうが忠義ちゆうぎを感應かんおうありけるか、添そなへや有あがたや女房めいぼう、そちそひ隠かくした此裝束しうきぞく、弓矢神ゆうしんの前まへでも、我子の武運長久むううんちうくとと祈いのらいで、猝せがれに切腹きつぱくさせてたべど、最期さいごをいそぐ調てう伏ふの願文ねんもん是見よや、帶おびに付つたる守まもり袋ふくろ、六字ろくじの名號珠數めいごうじゅず一れん、出世しゆを願ふも子孫しそんの爲ため、一人の猝せがれを見殺みぶつして、知行しゆう奉祿ほうろく何かせんと、始はじてあかす夫の誠まこと、聞きはと血みづけまよふ子故こゝの鬪たたか、女房めいぼうわつと聲こゑを上あがいかふ主の爲ため、やと迎むか、此餘尺よなたもあい腹はらへ九寸五分くわくあんまりむごい、どふぞ此子このこを殺ぶつばずと外ほか仕様しじようもない事ことかと、見れば志しとあき綠子みどりこの乳うぶ呑のたいと泣な出だ

すかへいや是が末期の水と乳房指害撫さすり、本又此乳母を、こんあ
難義の有共しらず、跡々何しておる事ぞ、イヤれ乳の人の花石を助んど、其
子の若殿よあらすと、いふをいへはすせひあくも主膳が手々かけたつ
た一計、アふびんやあ、レ花石主従の縁盡す、乳母のそあたの冥途の先
がけしたといのふ、今さら思へべいぢらしや、千年を生そふとあつがる
脊押付て、すへし身柱をけふの今主人のお役立そあた殺す爲よ炎す
へた、親の世界よりやせまいと、どうと身を投伏乞ゴむ、アうろたへ者
侍の子が主人の爲に、命を捨るがあんて悲しい、ヨリヤやい、儕が泣わめくよ
り此間涙一滴こぼさぬ、身共が胸成て見よど、座を組立めし、膝の雨疑
ひはるゝ障子の中、誤りましした兄様と、まろび出たる手束が袂一度ぬ
れし諸涙、暮六ツ告る鐘の音、我子の花やちりぬらん、執事の傍付山名
軍太夫のかくと座よ通り、ア主膳御身の科人警固の役切腹の檢使

身共ちつぱいで大罪人自身より腹も得切まい引つかまへて鱗裂やうと早く玄まへと權柄顔ケンペイザム女房若殿よ御最期の裝束早くくのふせりしあいこれ見さ玄やんせ何よを玄らすみわたしが此ア出をせぬ乳をぐりへてすやくコリヤ隙取ヒカツとお家の大事夫の心を無ナシとするかどきめ付られてせんかたなくハアそふじやなアとて毛叶ハタケ命あら遲タモトい程迷ミタマひの種ハネと抱ハグふろせばわつと泣ク御最期の時も時シ何ありと御機嫌直キゲンナリし、氣の付ぬと呵ハられて、あくく千束が指出すモチヤそび箱の竹馬ハコを見てよつこりの笑ひ顔ハジメばいくくと余念あさ見る悲しさを紛らすハシマ親ハセキ若殿ハセシロ機嫌ハゲンよいぞ此間ハシマ早ハシマだめろーと、泣クれ致しませぬハかしこい子馬ハシマ乗マサニ武士ムサシの出陣シヅチベハ着マサニかへて宮参りとすかせばすかされおとなしくのハ様參マサニとぬぎかゆる親子の縁ハタチの薄淺ハタキ黄余所ハタチより玄らぬハシマ妙共ハシマ神ミタマへの進上物はこぶ廊下ハラカのハシマめ

き聲、祝義不祝義一時々死裝束共白小神、伯父様美いへゝ着たと上下着
たをひけらかす。あらあらのまあやはんせあさ、亡者の形を嬉しがるに、冥
途の使がまねくのか、何の因果此やうと愛らしう生れ付、脊尺のびる
を樂しみよ來年へとふしてかうして、五ツよ成たら袴着の何のかの、此
上下の似合よふ、爺御よ其儘立派な武士の跡繼みこんあ袴着せうどり、
今この迄走らざりしと歎く、女房よらみ付、若殿よ一時も早く、切腹
有て然るべし。やいへゝ檢使の前じやが氣が付ぬか、若殿を忘れたか、
ア、成程へ。若殿様、御最期清ふ遊べしませといふ聲、涙よむせかへる。
女房よ介錯、此介錯を私よ、巴チひさ膝へ乗てつる腹へぐつと、つる腹へぐ
つともひ、澤山ろふよ是がまあ、是べつかりひ、わたしに敵して下さんせ、
エ、不調法など引退て、石堂介錯致さんと腹切刀逆手よ取子を抱取、抱
付、今手よかくる親ぞ共、立ちであまゆるいたへしる目もくれ心くら

め共、腹を極て、押肌はせぬがせ氷の刃幾度か、さし付あがら恩愛おんあいみ、乞めから
められ利腕きこうも乞びれ、わあゝき取落しのふ主膳殿、是程覺悟かくごへ致しても
此介錯かほりきべつかりに拙者せつしゃへせふも得致さぬ、御苦勞ごくろうながら武士の情、お頬
やと斗みてうつむく疊たまみの涙の淵、見兼て引取いたいけ顔、見ればさすが
の刎川はね川も、よひる心を南無三寶と、ちいさき肘かひなを持添て、がいと突バ身を
もだへ苦くるしむ聲を聞苦しみ、ハ可愛かはいやとかけよる妻ひき膝ひざとおばへて御苦
勞ごくろうく、主膳殿、に切腹きつぱく、相濟さみましたか、氣遣づかひ有いる潔きよふ只一思いひ、もふ息いき
へ絶たかとわつと泣母こりや泣妹こゑの、儕等こやしや、ほへずとお禮れいをやさぬかと、人の
涙なみだの乞かれ共我目の中の面目おもて涙なみだと血汐牛瀧ちけいぎゅうりゆ紅葉みみぢ落おちくるごとくあ
り、主膳なく、稚首三方おさなこさんぽうみすへ置、謀叛むほん人の此首、上覽ちらんよ備へらるべき
か、何さく、是式しきのほうづき首持參おさなこさんみ及す、師泰殿しいたいの目鑑めがねを受うけ、最前より
の次第、女が歎のばしり、迄とつくうと見届歸とどければ、どこへ詮義ことごんぎがいか

ふも志れぬ、そふ心得てお居やれどよらみ、ちらして立歸る、すゞみびつ
志やり立切襖、小聲よ成て石堂殿、ほ主人侍従之助殿をいさ是へお出し
なされ、何とおいやる、隠すまい追放の表向、奥の一間よ勧請の弓矢神
軍太夫めが今のお五音、此屋敷よおくにこゝ物、拙者よお預なさるまいが
何をアモ武士の瓦、石堂殿、ほ目見へは免のふ取あしと額をすり付うづ
くまる、其ほ一言が金打同前魂見届お預す、直よ今宵のくら紛れ、只今
手渡しやさんと、我子の死骸かきいだき女房妹諸共よ、つれて入間もぬ
からぬ主膳屋敷の隈々眼をくぱり心を、月なき夜半あれど、忍びの乗物
志づくと、寄浪千束が昇出る、こあたの障子ぐらりと明飛で出たる
奴の歩藏、何よもかも様子の聞た、侍従之助師泰殿へは渡しやそこの
いた退ずいかうと切侍る刃を足下よ刎川主膳手練の當身よ真倒うん
共いはず大の字形、息ひとまつた氣遣ひない、乗物やれどさわらぬ躰衣

紋繕ひ立てる、肩先目宛よぬふ手裏剣引取てとつくと見、先日切られし
鎧の穗先、打かけた。彼曲者、刎川主膳と云ふ。今日本より鍵鎧の
べ、一間の中よ聲高く刎川主膳とい世よ隠るゝ仮の名、今日本より鍵鎧の
名人鞠ヶ瀬、秋夜暫く待と、立てる宇治の常悦、嚴然たる其骨柄、胸よこた
へてぎよつとせしが、珍らしい名を呼だが秋夜とい誰が事。やあら
がふまい、南朝の味方よ、秋夜といふ勇士有との聞及ぶ、本名を隠し足利
へ入込、天下の武士を欺しと思ひふが、常悦が眼力よ、顯へしたればもふ
叶ひぬ、まつすぐよ白狀、と四相を悟る常悦よ、五臟を見ぬかれ鞠ヶ
瀬、秋夜、袴袴やあぐり腕押まくり、鯉口くつろげぐつと詰かけ、音又聞
字治の常悦、汝も楠の嫡流、南朝へ忠義へ致さず、妨あす人畜、サア只今我幕
下よ屬し、此一卷よ血判して、鞠ヶ瀬が首を擱か、但汝が首を渡すか二ツ、
一ツ、あんとくと罵れペ嘲り笑ひ、汝が胸中察する所、侍従之助を人質

よして謀叛の旗上せん計略、ちいさいく、其器量で大將思ひも寄す。
今日より我幕下と付べ、片腕と成べき男、ヤア常悦が連判状持參致せ、
ハツ答へて奴照平、一卷を指出せバ、ヤア鞠ヶ瀬、只今汝が手とかけた、あの歩
藏は其方が廻し者で有ふがな、照平きやつと生を入い、畏つたと打返す、
以前の小柄片手と掘むつくり起る早足の歩藏、残念く、主人秋夜の
仰みよつて、石堂を味方と付んと仕こんだ工、けとつた僻等生てて置ぬ
ヤアおろかく、左程と包む主従が、我と顯りす汝が手裏剣、大月が作の千
疋獅子、秘藏の小柄で秋夜が家來と知たる我、常悦が弟楠次郎正儀と
いふ者、ヤア兩人共と降参せよ、ヤア僻から降参せいと、詰寄二人を常悦制し
て、ヤア無益の諍ひいかみ秋夜、汝が鎗と數百人と敵すと聞、だとひ數万騎
の勢へ打破る共、常悦一人の肺肝をつき留る事ないつかなく、其方が
肺肝を見破つたる我眼力、大將と家來の器量の違ひ、合點がいたら血判

せいと一巻をさし出せば、秋夜取て押ひらき、遂一とつゝと見、天晴
天晴、正しく南朝を取立る義兵の連判、わり府を合す我胸も忽ひらく鍵
鑰、又、鞠ヶ瀬秋夜血判と鑰の血汐をゑつかと押、今夕力を合す上い、是
ぞ龍虎の兩大將、ゑさつて拜する二人の奴、兄弟主従揃ひの勇士、いざ此
上の石堂、有無の返答、聞切んと、かけ入鞠ヶ瀬、ゑばしとといめ、勸情の
間、鏁つたる箱を手づから寄浪、打向ひ、今日進上の此折、家中よりと
は偽り、誠り常悦が送り物、拜見せよと錦の御旗、添あやと二人の女、恐
れて疊みひれふせバヤク、石堂よつく聞、日月の旗を以て、軍勢催促など
との端武者の了簡、六十余州の軍勢よりほしき者へよき侍、旗を返して
恩をかけ、石堂を我郎等、召かへんと來つたれ共、主人の爲、我子を
殺す、バアかばかりの忠臣を二君よ仕へさせん事、大將の本意、あらず、神
明よかけて味方、付る心へあし、敵よ取てちから有石堂勘解由、戰場で

再會せんぞ、侍従之助又旗を渡し家を立よと情の詞、足利侍従之助氏満
それへ出て對面せんと、のり物明れば石堂勘解由、提出る我子の切首、血
沙を乞つかと連判状、押下つて頭をさげ、宰我子貢が辨舌でも、ひるがへ
され我忠心親子ハ一脉、世悴が血沙の此血判ハ旗を返して主君の恥す
すを給へる其返禮世悴が下る頭ぞと涙の額すり付く、^同サア禮義ハ一旦
敵味方旗上迄ハ此一大事他言をせぬが我寸志長居せば目よ物見する
立て歸れとねめ付る、^サ神妙く、二代の跡目それ其首の若殿こそ我味
方と、詞よ仁有血沙の判虎の威を借宇治の常悦、^サ此秋夜も今見遁す
何時知ぬ石堂勘解由、首の用心肝要く、^同サア夫よりの眼前よ若、某が討ん
とせば、僅主從四人よて鎧一領用意もあく、不覺を取かんとく、^サ其
爲よこそ常悦が遣へし置たる此進物箱の中よハ火炎を仕込すれどい
ハヤ燒討やきうちス、一人も残らず、鑿味方の相圖あいつハ此箱このとがハと蹴返す様よんさ

きよばつと立たる炎と俱よ庭へばらりとかけ合郎等、恩地左五郎和田
 新兵衛志貴源八、鎧鉢巻目釘をあめしに用いかよとつゝ立たり、ちつ
 共氣遣ふ事あらず、只今歸る供せいと悠々として、出て行、天下よ秀し大
 丈夫龍の威有て麒麟よ似たり、跡よ引添五人の若者夫よつれて捨行兄、
 敵の子ながら玄べらくへ、叔母と呼れしおい／＼あき、忠義よさゝれ石
 堂が千代もといのる稚子の死骸よよれる武士も、物の哀を身よゑる兩
 の袖よ寄浪立兼る思ひ／＼千束、いつか扱照す／＼日月旗の色、二ツよ分る
 南北朝嵐よづれて立出る

第四

文字よよへ裏表なき士も、かざるゝ世間内證、尾花玄げりし草津の宿
 露の舍と刎川よかけたる、雲の棧も、落てれたゞのおぞしと成、けふ宿が
 ヘの家移りと娘、相手の掃そうぢ世帶亥みても尋常、帯持手よ顯られ

し、表の方をうそく尋て、是へよい所へお宅がへあされましたといひ
つゝはいる實盛親仁^{さねもり}、具足屋の藤兵衛殿かよふこそく、見て下され
何へあふても宿がへといふ物へ、そうド志い物じやござらぬか^{イヤモ}居
くろめなざる、迄^ま、常住巾^{じょうじゆぢん}たり掃^はたりあされ、や成ませぬ、お袋様^のお
宿^{すみ}でござりますか、ちつとお目にかゝりたい、母様^の草廻^{くたびれ}て今お休用
が有なら奥へござれ、娘案内仕やと詫^{あんあいし}みアイと立上れば、然らばちよつ
と奥の間へと伴^{ともな}ひてこそ、入^はみけれ、近江路^{あづみぢ}や、草津の里^す、馬^の有^る、主を
恩^{おん}へべ歩藏^{ほざく}が一荷^か、葛籠^{つづら}、狹箱^{せうばこ}、鹽櫛^{しおくし}、箱下駄味^{げたみ}、桶^き、破^はれ壺^{からがさ}、古草履^{こくさり}、長刀の
柄^手も剃^{そぎ}さげ奴^{すくな}、荷^のふて戻^{もど}れべ^ま、歩藏^{ほざく}かいかぬ太義^{タケイ}、休みや^す荷^のをお
ろし、是^ハ奥様^{あざれ}付ぬ、荒爲業^{あらし}、怪我^{いたが}ばしなされて下さりますな、何の
いの、ちつとあとそなたの手休^{やすめ}と、掃^はたり巾^のたりして見てもかい志^の
あい女の手業^{わざ}、そりやきつい手助^{だて}かり、其かへりふ前^{まへ}見せて、きつと

悦ばせます物が有と、こてへさがして、コレおはぐろ壺、竈の後、又かゝんで居られたを、お前々不自由させまい爲、夫にまあく氣が付て添あい、
「あの人へれかしいつむり、是かへ、鼠めがどつから引てきたやら、二かいの隅、有た故、梅様、進せうと引かついで戻つた坊主、あまや
かした事計、持遊のいる年かいのと、口よ呵れと名がほよ、子のかれい
さぞ顯れし、折から表、頼ま志よ、くといふ聲、何事やらんと出向
へば、大和屋作兵衛から参りました、おかげよりまして、痛もどんと直
りまして殊の外悦びます、是へ左少、よござりませれど、祝義の印斗でござりますと、塗合折差出せば、歩藏受取内、入、何でもまんが直つて
きたと、ふた押明て取出す一封、コレ歩藏、こちの内へそんあ物、持くる覺
りあいがど、不審がれば、其筈でござります、表の柱、木寸伯といふ、
表札が残つて有が大方今迄此家、居られたる醫者殿で、宿替えられた

へおらず、其醫者殿の所おもと思ふて、持てきたりこちの仕合、わし次第
もあされませど、云捨て表あわせみ出だく、お使は苦勞くるらでござります、主人義
へ只今急病人きゅうびやうにんがござつて其病床かへ参られました、歸り次第お使の通り
や聞すでござりましよど、お慮外りょよわいながらおつまやつて下さりませ、マお
茶おちゃでも上りませぬか、よんれ出だあされましたと口先くわんでちよぼくさあい、
して玄あんもふて包銀ほうぎんはらふじませ、白銀三兩玄あんこためたと、戴所いたごへ頼ま
玄あんよく、そとやこそ又玄あんやと立出だれべ、男が片手さかてよ看籠さかまかご私わたくしの北國屋八
兵衛方へいえから参さんりました、す伯様はくさまのお宿やどみござりますかと、問たずねて口から
出だほうだい成程寸伯宿はくしゆくみおりまする、然らばおつまやつて下さりませ、
八兵衛はいへいやます此中しちゆうのふ目めよかゝりませぬ是これ少分すくなぶんみござりますれど、
餘所よそを囁ささやひました故ゆゑお目めよかけます、つきましては私念比わたしのねんひ致いたします
仁ひとでござりますが、腫物しもつものが出来できましてきつう痛いたむと申まことされます故ゆゑ同道どうどう

致させます、ほ苦勞あがらほ療治頼上ます。ど主人が口上でござります
と、聞いて歩藏打點き成程ほ口上の通り、や聞すでござりま玄よ、暫くそれ
よお扣へあされと肴受取内へはいれべ、めつそふな療治人もきてそふ
あふ、どふせうと思やると、氣遣ふおはしを目で呵、葛籠の内から紙子羽
織、そてらの上よ引ばつて、剃下隠す幸の、坊主鬢と引かぶるあたま付、見
るよおかしさこらへ兼納戸の内へ逃こめば、歩藏の志かつめらしくせ
きばらひ、八兵衛殿からの使太義玄やの、内へはいるまいぞ、取次の
人斗是へ通ら志やれ、ハイ私でござります、聞及びましたお前が、蒂木寸伯
様でござりますか、そふぞほ療治頼上ます、ふ成程愚僧蒂木寸伯、當時は
つかうの醫者でゑす、夫故あまり病用が、多ふて苦勞み存るから、近年現
銀であければ療治へ致さぬ、貴様其用意があすか、用意といふてれど
ざりませぬが、少々是よと紙入の底をふるふて小間銀三つ四つ、よい

嗜んでゐるすよ先のちやくぶく仕らふ、扱と見とや若が大方息子の煩ひであろ、と見て取せう、遠慮のあいまくつたへ。左様な事でござりませぬ、はらふじませ目の上がケ様み腫て殊の外痛ます、目の上でゑすか、若い者へ逆上するよつてまゝ有事、どれへ、チ、腫たのだんないへ、貴様仕合者玄や、是へ目の上のこぶといふて捨て置と鬼が摑所を我等助てどらすと傍よ有あふ古釘拾ひ、ぐつ志やり、突べ、だんないへ、助てどらすと又ぐつ志やり、アーダ、ヤ、きつう痛ます、とふぞ膏藥を付て下さりませ、だんないへ、助てどらす、暫く眼を明まいぞと身を捻向て、三里の炎よ張たるかう薬引めくり、目の上へべつたり張是が則いやしがう薬もふよいへ、と突やられ片目、かゝへて、立出べ以前の男が手を取て、は苦勞でござります、ナは家來衆、さつきの肴籠下さりませ、や、奥深みござるよつて聞へますまい、拙者がナ付ま志

よたそこいよくと呼へり、納戸へ入て羽織脱間も、^{ぬぐ}とてら布子ぬぐと坊主ぬぐあたま頭是はりくとお待遠かたとおと籠かごを渡せと氣きも付す二人打連うつ立歸りるおはしひ、納戸のんとを立てて人ひとをだますも程ほどが有あ笑止せうしあ人ひとやと袖覆そであわせへべ、歩藏ほざくも高笑ひかうしようはらうじませ世界せかいみはあはうあやつが有物あらわ炎えんの皮かわが銀ぎんよなるとは是はも偏ひざに寸伯様すんぱのふかけま宿しゆがへの物入程ものいりへ来てやつた、ヨヒよつとねだりよきたらどふせうと思おもやそそそや氣遣きうしひござりませぬと、表おもての張紙引ひきめくり、ねだりよきても寸伯すんぱの脱ぬぐがらと、鬢かづらをすつぼり、何なにときよといかゞかづいや、あだ口利あだくちので、大事おほの用忘うようとよと来た、と懷中かわうちを書狀しょじ取出しし、京きょうみござる常悅じょうえつ様さまへ何か密ひつじ事ことの此この状じょうけと旦那たんなを受取うけとたれど、宿しゆがへの荷はで遅おそなつた一走いっしゆいて参まいりままよ、いき戻もどり十二三里じゅうさんりを有所ある、あすの事ことよよいたがよいよいよく、若し急きんに用もちあら旦那たんなよ大おほきうしきう呵いかれる事こと、今からいたら初夜しょや過くみは歸かります、と形かたちよ似合あつあつぬ尻しりがる

さ裸引からげ立出しが、立どまつてキヤウ、是ハきつきの包銀、取て置て下
なりませど、出して渡すも受取も狀の落る氣も付ずとつかれとして、
急行程あく奥々具足屋藤兵衛岡、先程からおやかましうござりま矣よ、隨
分居くろめあされませど、小腰をかゞめわれそれより落たる狀を拾ひ上
そつと隠して懷へ入れど何の氣も付ぬ、たはしひ挨拶あいさうそこくよ、是ハ
まあ取込で居る故、茶さへろくく、左んせぬと、詞の端香はなかおい出しの茶
い呑ぬ共咽のぶすんばい我家をさして立歸る、おはしの跡を見送りて、主の
歸るゝ間も有るまいと、見やる表の方おもて、慾と惡とを兩の手つかづら
はる驚の善六門口からわゝ聲岡、秋夜殿の所へ爰でごんすか用が有て
逢ふきた、留主つかふてもいぬの玄や、あいとあがり口よ、高あぐら岡、是ハ
是ハ善六殿か、よふ尋てござんした、來ませい玄や、人よハ沙汰さたなでぬ
つくりと、益ほんがへしてもかけたが因果いんじや、唐天竺迄もこよやあらぬ、秋

夜殿へどこでごんす、急^{いそ}よ逢たい呼で下んせ。連合^{れんご}のちと用事有て、け
さから留主、戻りの程も知ねば、まわけふ。いやいりますまい。先月切^きよ借^{かし}
た銀、いつきても、くお定りの口上、其手^じやいかぬ。いやでもおうでも
逢てから、いつきえやつきせよやあらぬ。と傍^{あわ}構^{がま}のぬこへ高^{たか}み、もてあま
したる折から、又水^{みず}みちかき樓臺^{ろうだい}へ、まづ月をうるあり陽^{よう}向^{むか}へる花木^{はなき}
の又、春^{はる}よわふ事^{こと}やすきある。奥方^{おくがた}只今罷歸^{はいき}つたと、いふもひよろくち
せり足^{あしき}、是^はへ又酒機^{さけき}嫌^{うが}、そこで、其様^{よう}、そこといふたらかいつた所で
下された、姥^{うば}が餅^{もち}やの軒^{のき}の下で、雲助共^{くもすけ}が寄集^{あつま}り、天目^{あまめ}で酒盛^{さかめ}さいたおさ
へた、お肴^{さかな}よのこんよやくの田樂^{でんがく}、我等も一ぱい呑たふても、持合^{よど}の用意
があし、幸のそふらいし酒價^{さかて}よやつて、茶碗^{ちゃわん}で四五はい引かけて戻つた
何どどふもいへぬか、是から、奥方^{おくがた}み足^{あしき}さすらして喜見城^{きみじやう}と機嫌^{きがん}上
戸のじやらくらを、見て居る善六^{ぜんろく}むくりをよやしお、あたまたしるいよ

まい事、ヨリヤ内義との色事見よやこぬ跡の月切より借た二百両。もふそらへ。
断もいれまひ、今戻せ、受取人といがみかゝれど膝ひざを枕あて、誰じやと思ふたりや善六か、何じや善六かイヤおろすがあく、昔の刎川主膳顔見とひあい胸が悪い、高い顔おほらたか二百両の銀、戻してからせい素浪人と、悪口雜言秋夜あきよにたれい、立るハシく、其様よう腹立ると虫むしが出る、さらば其虫めがあつとくする様よう、二百両の金返済へんざいせうか、今でハあい追付我等立身致す、其時ハ二百両の金ハ五百両で戻す、其譯わけをちよつと咄して悦べそふか、これく、町人ふせいよ一大事を、酒が過ると其様よう、本性しやうを忘るハと常悅様の兼ての案あんじと、あせれどさらハ耳みみもかけず、拟我等出世の筋ハいつまんでハそふう、何じやハおらず大坂おおさかで、米相場まいあいばよかゝつたれ、設おきる程ほどく、ちつとの間ま百両が千両、千両が万両、馬よ付ておやんハ貫くわん目此草津迄持て戻ると思ふたれば目がさめた、な

んときつい、かきついたけれど又こらり、こりや横よねるのじやあ面
白い金かしてふすくられて、彌立ぬ、戻さぬ金無理と取ふ共いぬ、其
かれり又金の數程踏のめして腹いるど、すんと立べ、これ／＼本
性もあい人よ慮外仕やると歎さぬど、いへ共聞せず、ら笑ひ、
くさい慮外答、本性が有かないか、今此脚で問志やうと、突飛して踏のめ
し、口惜くべ金戻せ、いやありやこふじやと又踏付、蹴らるゝ鞠ヶ瀬女
房も、さへ兼てぞ見へよけり、秋夜何とか思ひけん、起直つてむすと座
し、女房、奥へいて身が刀持てこい、よくいやつとの思へ共切て仕廻
とのあんまり短氣、ハテ扱てこいといふ、何猶豫遲なる程此秋夜が
立まい／＼了簡成まい切て仕廻と、母へ一腰、携出、浪人しても以前れ
侍、素町人が慮外の段々切ざ立まい、すつぱりと切て玄まへと刀投出す
曾々悔り、何じやひおどすあい／＼、そんなおせしでいくのじやあいぞ、

金戻さみやいつ迄も爰へいがかぬ、^チ金戻す爰へこい、^チいかぬじや、何
のべしと口よりいへど、跡じより、^{ハテ}こひい事いあい金戻す爰へく
と手を取れ、^{イヤセ}夫よ^ハ及べぬと脚もがたくうろく眼^{コヒサ}ふるふ事も
何よもあい貴殿^{トモ}は借た二百兩、只今返辨受取れよと授出す刀又^ハ倫り
すりや此刀を^{ハチ}當分の金のかなり、千貫の折紙道具、大事に仕やれと
立派な詞^ハ醉^ゑもさめ興^{おき}もさめたる母女房鞠^{あざれ}て、詞^ハなかりけり、善六^ハ
夢見た心地、面白い金の濟^{すま}迄此刀、玄^{アキ}つかりと預つたど、いひもそこく足
早にいぬるふりして數垣^{キヤクガキ}のかげよ窺^{うかが}ひ忍び居る、内より母親我子^{なよこ}の鬢^{たよこ}
取て引寄てうくく、是^ハと驚嫁^{おどろきよめ}もそば杖^{たて}擲^{てき}伏^{ふせ}て聲ふるにし、臆病者
大腰拔^{ハラ}浪人の身の上貧苦^{ひんく}が夫程^{よもせつ}あいか、^{ヨリヤ}敵^か城^城を圍^{かこ}れ、兵糧^{ひやうらう}
に盡^{つき}たる時^ハ牛馬の肉を甘んじても、城を守るを武士^士といふ、其日の糧^か
に盡^{つき}たらば、母が肉をくふてあり共侍らしい性根^{しづね}を持^{ハシ}、譬^{たと}此身^ハ玄^{アキ}、

びしほゝ成どても其嬉しさいか斗、酒を見てハ賣ゐるへ、魚鳥又家財賣代なし。わづらあ榮耀又其身を忘れ、恥を忍び辱を受、町人ふせいが土足又かけられ剩其上又侍の魂迄人手又渡す業ざらしニリヤ此母が頭を見よ、十筋程有白髮又も油とろりと平元結、昔よかららず結立るハ成長有儕が出世、祝ふてたしむ恥白髮、其心を無足又する不孝者罰あたり、先祖を汚す畜生めど、怒れる目又も慈愛の涙、袖又深なす斗へ、おはしいいとれ手持あく、親又不孝あ其人又天の惠もなきと聞、とふぞ母邊のお心を休める様又秋夜殿と取付、歎けどそしらぬ顔ノロ、いやゝのゝ、京の屋敷を浪人ゑてからみつしりと武士のいや、よふ思ふて見たがよい、軍すれば命を的又仕損ひゑても痛い腹、町人の氣さんじ朝寐せうと酒呑ふと人に擲れ踏れる程夜の目がねよい、武士の付合あぶな物、とかく命が物種だね、そこで我等も手代奉公と出かける筈で、大津の問屋へけふめ

見へして歸りました。此上の様あは異見でも、もふ侍より成ませぬ。
すとや、是程母が恥ぢても、武士を捨て町人まちにんと成たい、成たい段か、侍
の魂刀たましりを人手ひとて渡したが共證據じやうきょと思ひ入たる有様よりよう、女房めいぼうもせん方そわんぽう
く、母は様の心こころと背く不幸者かう、女房の身みであへあいそがつきた、わしも隙
取とお袋ふくろ様よ、いつう勘當かんとうなされませ、勘當かんとうも及およぬ事こと、それ程心こころのすれ
つた事こと、無理むりといふもあんまり親おやぢがい、成程望むねの通町人まちにんとしてやらふ
、すとや武士を捨すさせて、老おての子こと隨ともが又順道じゆんだう、町人まちにんとなれば町
人の魂たまが有あ、祝のぶて母が餞別けんべつせうと、立たづくと座くわを立上あがり、一間の障子
押おひらげぱ、傍わざも耀あく、威おどしの鎧兜よろひのかぶとをかざりし、興おきさめてぞ見みへよけれ、
母おやぢの上座じょうざと異義ぎぎ繕つくひ、南朝なんしやう二代の忠臣宇治の常悦じょうえつと力を合軍用金あつぐんを集あつめ
爲ためて俄ひとのひんく細謹さいきんを省かへりぬ大丈夫だいじゆう、天晴母あまはれおやぢが育そだてがらご、頼有たのむらし、其
心こころと知したる故ゆゑ、最前さいぜんの具足屋ぐそくやを密ひそかと頼たのむんで威おどしたる好このい寸志ばなの餞別けんべつぞや。

然らば常悅が企^{くわだて}み、一味せし趣^{おもむき}を^ミ知て居る共、是迄親^{おやぢ}隠した^ハ事、
ならず^ハ罰^{ばつ}せられん、其時うきめをかけまいと、わざと其身を持崩^ぶし、親^{おやぢ}
よ飽^{あき}れ勘當受^{うけ}るそあたの氣^い、やつぱり母^{おやぢ}をかばふ心、嬉しいといひた
いがそとや聞へぬ恨めしい、出世^でたら我子^{わがこ}と呼^{よび}、罪^{みの}よあは^ハ子^こでない
と思ふ心で一日も^ハ子^こといふ物^{もの}が育^{そだて}られうか、首^{くび}かせ手^てかせ^ハ愚^{ぐろ}の事^{こと}、い
かある罪^{みの}よあふ迎^{むか}え、母^{おやぢ}も同罪^{ともみの}親^{おやぢ}じや物^{もの}子^こじや物^{もの}どうから覺悟極^{かくご}て居
る、母^{おやぢ}が事^{こと}の苦^{くる}よやまずと、常悅殿^{じょうえつでん}の力と成命^{せいめい}、刃^{いの}の鑄^つどあり、體^{から}古木
よさらす共、名を上^あるこそ弓取^{ゆみとり}の身^みの譽^{ほまれ}ぞと教訓^{きょうくん}よ、涙見せねと胸^{むね}の中、
子^こ故^{ゆゑ}よ曇^{くも}る一時^し雨^{あめ}あま舍^{やど}なきふぜいなり、秋夜^{しゆや}はつと飛^と去^はり、孟母^{もんの}が
教^おも、物^{もの}數^{すう}ならぬ母^{おやぢ}のお詞^{こと}、骨^ほ身^みよてつしひぞや、今迄^{つづか}包^いし我性^{じやうね}根^ねちいさ
き事^{こと}ハ小兒^{さうむ}の戯^{あざ}れ、母^{おやぢ}の恩^{おん}の此^よ鎧^{よろ}すぐよ軍^{つう}よ龍頭^{たつがしら}と、立寄^{たちよ}て押戴^{おし}悦^えび
いざも子^こも子^こ、親^{おやぢ}も親^{おやぢ}、女房^{めいぼう}を狹^へに悦^えぶ折^{たた}こそ有^い、いづくよ忍^{しの}び居^ゐた

りけん蠶の善六、小脇の娘をひんだかへ。何もかも聞たく、謀叛の張本鞠ヶ瀬秋夜、代官所へ訴へる、びこついてもこりや見い、手さしのならぬ様え娘めを人質と、罵る聲え遠の秋夜子故え、迷ふてためらふ内、女房すかさを持たる刀、拔手も見せず、あむあみだ佛の聲諸共、てうと切たる手の中え娘と俱え、四ツの體、ヤアかれいや孫を、夫の大事えやかへられません、女房でかしたゞ、シテ爰え都の名所がござる、西え島原ぞめいてすとんど色座敷、いつも見あかぬ女郎や禿をあつめて、けん酒むり酒口節事、ワイトサノ海遠き花の都も懸の海、仇名風故寄くる浪え情寄くる島原の夕日れ里の朝日かけ、かざす扇子の紅梅や、亭主が一枝入船の客の夫から泊舟、勝手ちよんくかへ、鉋子二階、二上り奥の間の、駒幸頭が、ステンくてんとたまらぬ色里の、遊びの春の氣色かや、レ奥からお手が鳴、中居共小座敷の掃除のよいか爐の炭も直して置、玄關や小庭水打たか、新七部屋で又

淨るり、出日の茶屋へたいこの作次、お迎ひの口車より乗てね出に間も有まいと、見やる向ふへ粹のこつびけふ大寄の大盡様跡のお供の體より作次廊風俗國々の人の心を迷へする里の名つらし、宇治の常悦思ひ寄邊の揚屋町ふろせが軒の深編笠作次が取持や旦那是が彼紅梅屋、サクふ入あされませど、亭主が額ハ榾で庭樹木のわしらひ座敷の物好風雅くと打通れべ、奥より四人が出向ひ、に來駕御苦勞千萬ど、禮義正せば、是ハく懲懲至極、今日の遊興ハ、禮義乱すが又一興堅いく、成程左様存て我々り、お出を待す早一獻先生よもいざあれへど、いふ間あく、名木の薰る福枝々の花をならぶる花競べ、風よ爭ふ風情なり、さつても見事堅ふてくあらぬ所へ色様方の月の顔、よよつと出ると和らぐ座敷、是からハ宇治様がこちからいての玉川様、武藏屋へ攝よやれちやつとく、太夫様の見へる迄、奥の座敷で呑かけふ、早ふくと口拍子、ニヤでかじた、色達み始

てのお盃、ひつかけろこらで呑込んだのめやうたへや一寸先の闇の夜亭
主諸共奥に入、見渡せば、柳櫻も一やうよ、對の行列狹箱ふれさく大鳥
毛、ふつてく振付し、戀のいきちの、いわた帶、松み宿かる若緑、雪や氷と
いつか扱解て流れの玉川がお供、廻りに百万石、かゝる例へ又世よも嵐
よ匂ふ梅が香の軒端、間近く立寄ば遅いく太夫様、は全盛故御勿駄アマツタ
早ふど、いふを諾す家來よ向ひ、ヨリ皆の者早歸れ、ナシよつても奇妙な太夫
様、仰山あお前の道中、玄つかい祭の練物と京中の是沙汰、アお供へお前
のに挨拶あいさつどふいふ事でござります、れ前方も玄つての通侍從之助様と
深い中、過し座敷のに遊興義詮様のに憤り、わたし故に追放、其時死ふ
と思へ共情のれ胤たねを身み膚し、生あがらへしき身の上、大勢の供廻り
ハ、細川頼之様さかわ らいしの付人、おなかのやしのお格式かくしき、ナットもふ其跡いのぬ事
く、それハそふと今宵の約束やくそく、いよ／＼今のお方かへ、ア洛中らうちゆうで噂うわさの有

常悦様、お前をきついた執心じしん、とふから座敷ざしき、夫おの嬉しい外へ行ゆねとああたなら、付合あはますお心こころか面白おもしろい、毎日まいにちくお出でを松野まつの、れ岸きしお豊奥とよおくの吸物すいもの、わしがちよつと間まをするともふあいつらがとせりしやく走はしる亭主ていしゆ、引違ひがふ、たいて持もの頓作とんざく作次さくじ、やく太夫様だいぶよう、奥おくの軍ぐんまつ最さい中なか、我等われらが産土酒うぶさけの神かみ、大盃おほはで三さんッ四よッ引かけたするが小判こばん、きやうといじやござりませぬか、お前まへを待兼呼まわらひでこい、遲おそいくとめつたむしやう、きつい惚はれやう、早はやふいておやりあはれませまことに、いつ見みててもくくきくとした作次様さくじよう、そんならいかふとはづと福ふく、ちよつとひかへて申あらわ、此中上かみたみの數すう々々、よいお返事まどかごをと寄添よせつけ、わしが此憂身うきみの上うへお前まへも知して居ゐてからと、よそえ吹ふきあす奥おくの間まの、あの足音あしゑの常悦様じょうえつよう、見み付けられていたまらぬく、此間に我等われらのこもかぶり、呑のほして參さんらんと、勝手かつてへこそい走行はり、ほやく機嫌きげん、立出だきだる宇治うじの常悦じょうえつ、太夫だいぶが傍そばみ、指寄さしつて、そも

じが聞及ふ玉川殿か、初對面から打付た挨拶あいさつハ役用捨、あんとだかれて、寝る氣いきへあいかと松よもつるゝ薦ひたかづら、あの前が、聞及んだ常悅様じょうえつさまと、背ける三筋糸のあや行末おひまいたが肌はだふれんべの花はなれ前まへ心こころよ惚はなれる氣か、但器量さむりやうよ惚はなれる氣か、心こころよ惚はなれた、そりや嘘うそじや、あんじ過かたしを枕かた語かたれ、
誠まことさへ見せたら、いやどひいへさぬ、うりや其時の事こといなど、いふよ常悅刀じょうえつとう投出なげしゆつし六十餘州よほしゆうしゆよ常悅じょうえつが魂たまを任まわす者もの、そもそもじならで外ほかにあいどふぞ私夫わたくしよ成なまいか、日本國にっぽんこくよあらびあい、お前の大事だいじの魂たまを、任まわす者もの、此玉川、合点あてがいたか、そんならいやか、然らば後返事あとまわごを待まつぞ、後の返事まわごの私が魂たま、常悅じょうえつが其魂たま預まわりましたた、必ず後まわごよ、お前まへも後まわごよ、思おもひもおもき一腰だつさを、携たずさへ奥おくへ入い相あ遇あ、中居なかゐが運はんぶ大燭臺だいぢゃくたい庭ていの燈籠とうろうそれくへどもす、廓くるわの夜よの花丁子頭こうじやがしらの夫めならで、常悅じょうえつ斬髮ざんぱつ打うちかたふけ、心憎こころにくいれ、頼より之のが、人數ひとすうを付置つけて置くア、玉川よしかわ、手てよ入いるが、一計畧けいりょうど、天下あまを呑の込こたばこの

煙ひよこく來かゝるたひこの作次^間やく 常悦様奥ハ彼色様が、大勢
を相手^みきつい大酒^{ヤマ}あれへとそしり立れべ、いやマア其太夫を爰へ
よべ、玉川様を爰へとへくぞいて見るお心か、それあら私が取持ま志
よ、常悦が心の儘^{まき}ならぬ太夫を、そちやくどくか、^{マテ}蛇^{ヒツ}の道^ハ蛇^{ヘビ}、色事
れたいこが志りませそ、そふ宗^{モト}やござりませぬか、^マたいこ^ス似合^{シマ}ぬうい
やつ^ク、後^ミくと奥の間へ、打連て、こそ入^ムけれ、思ひくし思ひの
中も、思ひ余りて憂思^{うき}ひ、醉^酔たぞく、なんば醉^ムても此一腰^メ、目貫^メハ秋の野、
身^ハ覺^ハ有行安^ハ、ことや道堪様の秘藏^{ひざう}、是^ハを持常悦^ハ、噂^{ハシナ}よ連れぞと、様の
敵^{イサ}、さつき^ハ渡した此刀^ハ、道堪様の子と志つてか、志らむか、大事の
所^ハ兼ての思^{ハシナ}、今宵^{コヨヒ}の内^ハ、をしおうんじて、殿様^ハも逢れど、太切^ハあおあ
かのや、よしない縁^{ハシナ}よ闇^{ハシナ}、闇^{ハシナ}未來^{コトハシナ}のと、様^{ハシナ}、^{ハシナ}逢たかつたで有^{ハシナ}な
追付^{ハシナ}敵^{ハシナ}取^{ハシナ}まると聲^{ハシナ}をも上^{ハシナ}忍び泣^{ハシナ}あかぬつら^{ハシナ}と逢^{ハシナ}顛^{ハシナ}のう^{ハシナ}と、胸

の思ひへうづみ火の玉川様、いつの間も作次様、あがつたのく、櫻の
奥といふ貝かいで、お前あれであがつたらたまる物玄やござりませぬ、夫も
マナガたらしい刀をさげて、あぶないく、其刀私が、シ作次様、此刀ハ大
事の刀渡之事ハ成ませぬ、そぞや宇治の常悦様と抱れてござよしあるか
こゝろじやあ、といふたらお前の嬉しいかへ、戀こゝ上下の隔へだてはない、腹
が立ます、其腹の立物が、取持ふどなせいりんした、こんどんざい邪魔
する氣き、譬たとへの様よいりんしてもわしの大男が有、そんなど
いのぬ物でござります、嘘うそと何を、何をと其刀、そぞや宇治様の魂、其
魂をふ前が玄つと大事もおかけなさるから、お逢なさる心でも
ろ、人の心こころ上から見へぬきたあい物、今宇治の常悦様なましゆ、大名をも下くだ
見る大福人、我等われらの牽頭たんとうのすかんびん、洛中らうちゆうのいふよ及およす、國々迄聞へ
た玉川様たかわ、お付なさる當世とうぜい、シ作次様、尤心ごんじや腹が立筈たま道理ぢで

ござんも、そふ思ひれて、心が濟ぬ、大事の、事あれど、打明て聞す程
よ、いふまいといふ誓言せいごんを、死だ二親あらくの庭さきへ、嬉しうござんも、
コレ奥よゐる常悦じょうえつへと、さんの歎かた、聲が高い人が聞力きりき成ましよ、エッセ忝ねん
い、まだ咄とつす事が有人目ひとめ立て、一大事と、燭臺吹しょくだいけも、玉川たまがわの、福ふくひらと
と燈籠とうろうよかかる一問いつもん、玄あらの、開あら、探さぐり差寄さしおき、ヨリヤ妹めい、驚おどろく、始はじて名
のる兄弟合点行あてんぎょうへ尤、父永井道堪だいちかんの細川ほそかわの譜代母ふだいめ、廼な互たが、若木の
花盛ざかりみつ、密通ひそかにうつの事顯あらわれ、切腹きつぱく、極きわ所しよ、臺様だいじょうのお情おはなしみて、二親のお命おみこと助すすりへ
助すすかれ共、家の、おもて後あと日の答こたへ、夫婦一所ふわいしやく、居ゐる事叶かなへ走はあふぎの別れ、母め
初産はじさん血ちの上うよて、別れし故ゆゑ、譯わけ志むすらす、祖父ちうじの咄とつしで父ちちの事こと、聞きと等ひとしく
御行衛尋廻ごこうえじんかいれべ、口惜くわいや常悦じょうえつが討うて立たつ、南無三寶なんむさんぼうしあしたり、此敵この敵てきを討うい
いではど、幸頭こうとう持もとさまをかへ、本望ほんぼう遂とくるが父ちちへの孝こゝ、又其方そのの後連ごれんの腹はら
いかれど正ただしら殊こと、親おやぢの顔ほほへ玄あらぬ兄あに、うかつうかつよ云いて、合点あてんせまい、

さすれば却て大望の妨と成故、是迄包で居たひいやいと涙はちらく
血筋の思ひ斷、せめてあひれあり、妹も俱、父の事思ひ出せしとも涙、
と様のお嘆しで兄様有と聞たれど、其兄様が妹よみを付ての姿やら
くらへどふも合点が行ませぬ、其疑ひも尤、おことひかよかい生れ付、敵
を討心が有かどふかうかととつおいつ、戀ではかつて心を探り、誠を
見た其上でと、思ふよ違、ぬそちが心庭、大歎の常慨を、討ふといふた其
時の、兄が心の嬉しさを、推量して、くれ妹といへば玉川涙よくれ、ほんよ
お前やわたし程、親よ縁あき者、あい、お前の隣様わたしが母、別れた上
又ども様去年の霜月十日の夜、切られてお隠遊ばした、其時の無念さ
悲しさ思ひやつて下さんせと、互よ手よ手を取かれしわつと斗ふ、泣沈
む、障子の内よ常慨が、四天王と頼んだる八尾の半六和田新兵衛、恩地
左五郎志貴源八、二人が嘆し聞共立ちす、ヨリヤ殊泣て居る所で、色よ事

寄渡せし刀とほけた顔で色ひかし酒を盛てもりつぶし寐入た所を只一討、兄が後詰づめ又扣ひかへて居る必忽るな合点でござんすといふ物の、おあかなやし、赤練あかねんあ妹、大事の此場でおくれるのかアイツア いけアイ、そんならちよつと兄様のふ顔の見納おさなめ實尤げゆ、おれも見納め暇乞ひまごと釣燈籠つりとうろうの福ふくを、ひらきと取ば後の障子しようじ明ると見合す顔と顔おもてア常悅公を討んといふつゝい兄弟此事早速言上と、云捨奥すてへ飛とで行、南無三寶と傍そばなる刀、取と早く我腹へ突手つつきとそがり是いまわ、早まつたは自害じがいと、取付とりつけけべ、ア妹密事ひそひじを歎かきみ悟わからられて、一生歎討事叶かなうじぬ、此儘じがいで朽果くわいんより死みで未來の父母へ言譯いひわけすると苦痛くわうの深手ふか勿もつ体たいない兄様を疑ひ過た計こ、早まつた此有あ、何此兄を疑ふと、様の家の秘方ひほう南蠻なんばんの龍起土りゅうきと傳つたつた大事の毒藥どくやく此毒藥どくやくで今宵よの中、常悦じょうえついふと及そべ走はし添そば者しゃ共皆殺みなぎしと、思ひ詰つづめてあの屋根の天水あめのよ一夜浸ひたすが大事の口傳くでん、其事ことおまへふ

隠したが玉川が身の因果とふぞ本望遂る迄生てござつて下され。せ
きくる涙玉川の水を張る計あり、道理でかしたく、天成父の器量を
受うかつゝ大事を明さぬれ、尤々いへぬ逆恨せぬ只うちめしいへ此
體先達父の顔もぢらす、死でも逢れぬ親子ハ一世、妹愚痴など笑ふてく
れな、父よ逢たいく、とさすがの兄も迷ひの涙、妹も正躰あくとも様の
刀みて、腹切どりあんまりむごい、何此刀ハ親人の、此卷物ハ毒薬の秘
方書、とも様のお手、是も増たる形見へあい、とも様と思ふて、冥途の迷ひ
晴らしてと手も渡せば、押戴、ア、有がたし添なし、日比の本望成就と、ひら
く後も常悦が、こまぐと讀終り、金江勘兵衛手柄が見へた、毒薬の秘方
書只今披見、命を捨て常悦も、忠義を盡そ古今の勇士、天晴くでかした
と、聞よ苦しさ打忘れ、寸志斗の忠義をば褒美の歌詞、有がたしくと
血汐ながらの禮義あり、玉川ハ有もあられず、口惜や憐等よたゞか

られ、親の敵も得討ぬのみか此うき恥もふ是迄と敵の指添さしつけぬく手をね
さへて其敵討してやろ、よ、とも様の敵ひうなた討れてくれる心庭こころば
子細こまいへねば合点行ゆきまい、再び南朝なんてうの代よひるがへさんと心を碎く此勘
常悦じょうえつ尋求さめうむる毒藥どくやくの軍用ぐんようの其一ひとつ、成程其役目拙者おづかよど願ひ望し此勘
兵衛ひょうえ、そあたの父ちちが毒藥どくやくの秘方ひほうを知したが身の毒藥どくやく、ひそかひそか立寄尋ひそかひそかれど、
いつかあいへぬ家の秘方ひほう、謀叛ぼはんの様子さま悟さとられてはど、いたりはどはあたの方ほうへ傳つたへし家
だ一討ひとうち書殘しょざんしてやあらんかと、家内いえうちをさがせば、うあたの方ほうへ傳つたへし家
の系圖書けいとしょ、細川家の浪人なまこの嗜たしなみの此一腰ひとわき、持歸もどりしハ一ひとつの方便ほうべん、常悦公じょうえつこうを
敵てきといひあら、腹はらがへりの兄弟いりどたゞかつて名乗合なまなまわ、敵てきを毒どくで殺ころさんく
だましすかして秘方ひほうを志おもらんと、思おもふよ利りききふことことが心こころ、此方便ほうべんを仕損そん
せば、腹はら切きて相果あしかわんと、思おもひ詰つめたる障子しようじの内うち、心庭こころば悟さとりし常悦じょうえつが戀へんよ應おう
する謎なぞ、其に斗略とうりやくを某それがしが、折たたよく悟さとつて此ごとく、腹はら切きばこそ毒藥どくやく秘

方、今月今日常悦公の御手より入りし今の悦び、おこどが慎、憎からふ腹が立、と親の敵の金江勘兵衛かんべや、切くと覺悟の躰思ひ切て玉川たまがわ、勘兵衛が突こむ刀ぬくより早くあひあみだ、金江をさうと一討よ切り女の一念力あへあく息いき絶ぜつけり、いさぎよしいさぎよしと常悦が詞の下、四人の勇士ゆうしも走出しゆしゆ、兼ての望此秘方、今日御手より入からはから、片時へんじを早く所ところの手分、成程なるほど、室町むろまち、鞠ヶ瀬秋夜まりがせしゆやが相圖あいづを定め、時節じせつをはかる此毒藥、白川鴨川堀川の川上かみを流しけけ、高の師泰一味のやつばら麿みやうろ、我々われわれ八幡の里、ばかりし支度しおといざ用意と玉川、引立奥おくより入、跡へむらがりくる桶手ともて四人の者共追取卷おひきまき謀叛ぼはんの張本宇治の常悦、細川が軍法ぐんぽより付置行ぎやうち列則捕手、一味のやつばら遁のがれぬと、十重廿重じゆぢゆにかこふたり、常悦じょうえつへ裝束しゃくぞく改め、上二階じかいの様先よしん、かけたる風鈴引かざりぎり、奇代きだいの手の内當うちなりへ石火矢いそひや碎くだて落おちる用水うすいの壺つぼを漲あふる秘方の毒藥、捕人つかはりの殘のこら必死しがい害の山やま、旁わき悦えべ心

見の此毒薬謀叛の手始め打立とぞく、おりて立出る門出のに俄
四人の武士死害を一目暇乞、心の念珠石清水八幡をさして「出て行、常悅
秋夜が謀叛の様子、具足屋藤兵衛が注進よつて政所より兩執事を始
石堂勘解由威名を照す高提燈人馬のひき地を動し天下の大事と白
砂よ頭を下て、指出モ一通、頼之取て拵こそく、噂よ違ひぬ謀叛人顯れ
れしハ是吉事急又討手を指向べし、といふよ師泰志たり顔、藤兵衛、こ
れい事も何もあり徒黨の人数いか程有、心を乞づめてとつくりと誰
で有ふがどいつで有ふが真直よサアいへと、かのが工の相槌よ打點いて
具足屋が、そんあらゆ上ま志よ一味も一味大きな一味、足利侍従之助と
いれせも果そこらへぬ石堂、下郎め、氏満卿を誰とか思ふ、忝くも義詮
公の甥君、今一言いふて見よ、舌の根切て切さげんと居尺高よきめ付
れべ、師泰大音上、徒黨の人数をいりさぬ石堂の胸中いぶかしと聞よ頗

之より、膳兵衛又繩を打はつとこたへて高手小手（手）、同し穴の狐侍乙置
や狂氣めされたなど、欺く雜言からくと打笑ひ訴人の者よ繩打撻貴
殿眞念あされしかど柔で受る、乞つべい返し、勘解由すつとすみ出今
之聞の通下郎が訴人一向跡かたもあしどいへ共世の人口をいかゞ、主
人氏満がヤ譯、謀叛人常悅が討手の役目、拙者よ仰下さるべしと事を盡
して相述る、ア推參ある願ひ、疑ひかゝる氏満の其家來として、討手とれ
叶ハぬく、常悅が討手ハ某、ア師泰が家來共、討手の用意と立上る、石堂
向ふへ立ふさがりヤとこへく、一旦願ひし此討手妨せバ執事とひり
さぬと詰寄、詰よる刀の柄頼之りわつて入かくる天下の大事をかしへ
私の争ひ不忠なりと、せいする詞利の當前、石堂ハ是々直（直）、八幡へ立越
常悦を揃捕て来るべし、秋夜が討手ハ此師泰三寸繩（在）よくし上、頼て
歸るハ覺の軍術（有）リ、勘解由、常悦ハ軍慮の達者、討もらさば家の滅亡合点

か、何さく秋夜の古今の鐘の達人、鐘玉の用心と、互に争ふ用意の供、十
手捕繩さすまたと騒ぐ人數を頼之下知して、鞠ヶ瀬秋夜が面肺を具足
屋藤兵衛よく知上へ、彼地の案内手引の役、必忽るな早打ちの、詞へ重き
石堂師泰はやり切たる式禮目禮飛がごとくよかけり行、かくて鞠ヶ瀬
が屋敷より捕手の者共四方をかこみ、雲霞のごとくむらがれば、天地の
外より出んれ玄らす、今ぞ必死の秋夜が働き、得手の鍵鎗突手よ百人、なく
手ひらく手數千の寄手、蹕横みぢんよ打碎かれたゞよふて、よつて引、虚
を窺ふたる高飛彌三次、捕たとかしるを腕捻上後様よ二三間、うんどの
つけよ反川次嶋、二番三番右左、跡り一度の惣がしり、鎗よかけられ飛り
人魂人つぶて、さ玄つたりと歩藏が、我身の運も月夜よ釜鍋蓋枕たばこ
盆摺子木走水壺徳利すりこ鉢、備前焼のだんびら物、真向よかざす大わ
らひ、主従よ切まくられ、師泰が組子の者逃るそ、やらじと退て行、物よ動

せぬ嫁姑得物提かいと、數秋夜が働き、見送りく、深入して不覺を取
あ、長退あざんあ我夫と、あせる透間へ付入組子、藤兵衛が案内みて二人
の女捕へんと、捕たとかしるをかけはしがひらきとはづす燕のものじや、
長刀小脇よつゝ立母、ひらめく光りよたぢくく、たるむ所へ付込及
先、年寄み似合た役救取んと長刀よ、あばらをかけ聲かけはしが、冥途の
供して下んせと拜打の大げさ切、具足屋組子兩方へ四つよ成て死でけ
り、猶も心ひ赦されど、心の弓張弓取の、妻と母とが顔見合せ、可愛娘を
切たのも、大事を隠ろふ爲べつかり、其かいもあふ母様、嫁女、武士の道
誰世ゑ、始し物とかきくもる心ゑ、思ひやられたり八幡よ、常悦が、西谷
の坊の高樓よ、上つて見渡す、鬼門の方、怪しき雲立眼をさらぞ、窺ひ、窺ふ
寅の刻、風ようろふく寄手の太鼓胸よ轟く、秋夜が妻、何思ひけん母諸共
奥をさしてかけ入り、そんく然たる常悦が、眼血走髪逆立心得ぞ、

黒雲くろくも村立地むらだいちを犯す、雲くもに陰かげ、我隱謀わいぼう、天下あひだを奪ふ味方みがたの運氣うんき貫く白氣しらきの國家かっこくの愛雲あいぐも、味方みがたの爲ためよは是凶雲けうぐも寄手よて、北方ほっぽう則水みかた、味方みがたの南朝なんじょう水剋火みのり、時剋とき一陽いっよう發はつそる反逆離はんぎゃりの卦けいよ當て君臣父子きみしんふし、一味いつめいの心こころばらくよ離はなれる卦けい坤こん皆斷かいだん、秋夜しゆやが手てを洩あけしけ必定ひつぢやう、天成かな命成かなと障子しようじ引立入ひりいりよけるさしを騷さわがぬ鞠まりヶ瀬せが母おやと妻めいとと傍わきを見廻みまわし、人ひとを助すくる健氣けんきの勵はたらき、圍爐裏いりろうへ投込連判狀とうらんれんぱんじょう、一味いつめいの姓名せいめい消失しほせて、火氣炎ほきえんくくど燃上のながるや母様おやじやうかく成果せいごくる印いんよや、宵よにわたしが折おちくべたる釜かまの鳴音悲鳴きやうめいの聲こゑ、胸むねよこたへていまいまいしく、此母このおやを臥所おひそへ入風いりふを除のぞる此紙張結目しじやくじゆめいも解とけぬよ三度迄落おちし不吉ふき、うあたあたよも、お前まへよも、隠かくしくた此謀叛むほんよふ孫こハ死おました、あきやんあきやんあ、お歎遊かんゆうべすべす、とつぱよいへど心こころの内うち思おもひやらるる、折おちこそ有あ、寄來よもるは師泰しいたいあらで細川右馬頭さきがわのうまとう頼之よりゆき、それと見るより覺かく悟くの二人髮ふたつぱのそゝけを、かきあであで、頼之よりゆきが前まへ両手りょうしをつきつけよしなき我わ

子が謀叛むはん又付討手の役ひ苦勞くろうや、是成な秋夜が妻めともかくも計はからひと覺悟極きわめし、風情ふぜいありて、健氣けんぎなりく、秋夜が事こと暫一時の内召拘置かえしたれば、心庭こころばによく知したり、其鞠ヶ瀬きくがせが母女房天晴めおとぼうあまはるの覺悟驚入かくごく、大法だいほうあれは是非せひあしと仁者にんしゃの繩目なわめ、かく共とも乞こららず、秋夜歩藏あゆぶざう兩方りょうぱう、兩金剛りょうこんごうのあれたるごとく、二人の有様見るよりを、たるみよ付つけこむ捕手つかしの者組ものぐみでとらんと取付とけつけを、蹴飛けとし蹴けちらす秋夜が衝はじき、歩藏あゆぶざうの兩人の繩目なわめよはつと氣きふくれの、よみへ大勢おおぜいおり重かさなり、組伏くみぶくられたる、無念むねんのはがみ、鞠ヶ瀬きくがせの難ひじ人原ひとはら獨ひとりんで授退ゆけたはつたとねめ、うぬらよ取る、秋夜よあらすと、いふよ細川實尤さねよ此賴之このざいと一勝負しやくぶと、優やうと立向たむきへば、よつこと笑ひ、拔身投捨ぬけみうし師し泰たいが手勢ていあらべ太刀たての目釘めくの碎くだる迄まで、切きまくり、大將だいじょうの首提ひつさんと思ひの外ある細川殿ほそかわどの仁義じんぎといふ鋒先ほほせんよ、向むかふ刃のも、さらよなし、腹はらかき切きて死死んずなれ共とも寄來よもぎられし又本意ほんいつ有ありまじ、西舟三ヶ國にしふなさんかくによ釣つりがへ

の此片腕繩打て高名有と押廻したる古今の勇者頼之も感^{かん}みたへ、其罪を憎^{そん}で其人を惜むべしく、頼之がかかる繩わづか五尺^よ足^{たら}ね共^{じやう}五常^{ごじやう}を以て禁^{いさしめ}る天下の捷^{おきて}の此繩と、かくるもかくるも仁者と勇者、不忠^{ふちゆう}の忠^{ちゆう}や母女房かくる時^{とき}、も主家來跡^{あと}、引添奴^{ひき��の子}が繩目^{さな}、引立^{ひきだつ}よど頼之が此場^ばを辰^{たつ}の一天^{いち}、室町殿へ^{むろまちどのへ}、「引て行一日の善惡^{ぜんにょく}」一朝^{ちやう}、有今^{いま}予限^{よげん}の已^みの上刻^{じょうこく}、常悦^{じょうえつ}の上段^{じょうだん}、物の具^ぐ、鎧^{よろ}必死^{ひしき}の規式^{きしき}、三方四方^{さんぽう}並居^{ひき}る勇士^{ゆうし}、弓矢^{ゆうし}とかゆる長柄^{ながじょう}の鏃子^{とくし}、逆^{さか}よめぐらす最期^{さいご}の酒宴^{しゅえん}哀^{あはれ}、も又、いさぎよし、折^{おり}しも聞ゆるときの聲^{こゑ}、四人の勇士^{いさみ}をあし、我々^{われわれ}が討手^{のやつばら}間^ま近く寄しと覺へたり、此まよ打果^{たがく}んの無念^{むねん}の至り、一あてあてん常悦^{じょうえつ}公^{こう}と、詞^{こと}も半分はやりをの麓^{もと}をさしてかけり行^{おこ}、引違^{ひきだ}へて入来る寄手^の大將石堂^{かたご}勘解由^{かげゆ}兵具^{ひょうぐ}、あらぬ長柄^{ながじょう}弓矢^{ゆうし}たづさへ、まづくと立出れば、^四一別以來^{いらい}珍^{めずら}しや石堂、日本無双^{よし}の常稅^{じょうぜい}が討手^の向^{むか}ふ汝^汝が出立神妙^{しんみょう}

ありく、敵を取とて不足あく。最期さうごの一矢を射なるよ力有ありと、弓矢追お取とつ。
立たたりたり、いふよや及ぶ此石堂、乞受こひうけて向むかひし討手たたかひどらんと思おもへ共、今いま
詞の健氣けなげさよ、勝負しおぶを一矢を決けつせんと、一同いっとうよつがひよつびいて放はなつ矢
つぼの互たがの手ての内うちでうどとめたる弓ゆきのほこわり割符わりふを合あす矢をかと矢をか石
堂取とてさつとひらき、よくく見みればこひいかよ、書翰しょかんよあらぬ和わの一
字、常悦じょうえつの矢をがら授捨ゆだね、おろかなり石堂、此一通ひと足利より常悦じょうえつが命助
んとの事あらん、唐天竺とうてんしょくが一いつ々々あり寄よせたり迎むか一方いちらんを打破はくないと安
けれど、所存有あて捨する命み、教書きょうしょ見るよ及およべど、星ほしをさいたる明智めいぢの詞、
勘解由かげゆ大きに感かんじ入い、今汝なが射のかけし一通ひとつ和わらぐといふ和わの字をすへ
し、察さする所南朝北朝、和睦わいはを望のぞむ邊へんが心底こころ、南北和睦なんぽくましませば死
するよ及およべず存命そんめいし、忠勤ちうきんあれ正行公なげむちゆうと、立寄たよ一間いつまの長押なげしよりさつとお
りたる用意あらわの網あみ、常悦じょうえつよつこと打笑たわむひ、謀叛ほんばん人の張本ちやうほんが、身みよかよかる天あまの

綱、かゝる方便も汝等が妨をよけん爲、先達て討死せし正行が事忘れた
るか、常悦と改名せし此正行が最期の詞、いひ聞すよつく聞、我南朝又有
内ハ南北の軍止事なく、天下の亂れ万民の歎き見るよ忍びず、謀叛人と
成て生害せば、自然と和睦も調へんと未前を察して逆徒と成、本望とげ
たる今日たゞ今、討手よ向ひし石堂勘解由、反逆人を助てハ日本の王法
立ず、常悦が首よりも汝よ渡す賜有と穢、ひらけバ、玉川が、毒蠍の口を遁
れし心地、四人の勇士を廣庭よ必死を極て扣へたり、潔しく、時を見
て時を計、運を見て運み死す惜いかなく、思ひ極る汝が忠和睦の事ハ
氣遣ひ有な、帥泰あんそが妨共此石堂が有上れど、いふも答ふも勇者と
勇者冥途の先がけおくれじと我モ、くと押肌ぬぎ、五常を納る逆徒の
最期、古今より秀し敵と敵みがきあふたる五人が切先貫く涙、玉川がふな
かのやうに大將、あだをかたきもわれと身を天下よ捨たる常悦が最

期^きの程^ご受けなげなる

第五

其臂^{ひじ}をいからして以て車^{くるま}を敵^{のぞ}と、汝^{おの}ぢらずや大^{だい}蠶^{せき}蠍^かと伯玉^{はくぎょく}が詞^{こと}あたれるか。逆徒^{ぎやくしよ}の運^{うん}を弓折^{ゆみ}て八幡草津の露^{つゆ}と顯^{あらわ}しれ、既^{すでに}都^{みやこ}へ引渡^{ひきよ}す。大幕^{おほのまく}の中央^{ちゅうやう}より侍従之助氏満公^{しらべゆき}、葉末^{はばく}の姫^{ひめ}も祝言^{しゆげん}調^{しらべ}ふけふの妻始^{はじ}め、義詮^{ぎせん}公^{ひさま}の名代^{なだい}、胸^{むね}わるながら執事師泰山名軍太^{しらべゆき}を隨^{したが}へて、討手^{うしゅ}の歸^きりを松^{まつ}かけや、事嚴重^{げんぢう}と見^みへよける、かしる所^{ところ}へ細川頼之^{ほそかわより}、秋夜^{あきよ}と繩^{なわ}を討手^{うしゅ}の武士共前後^{ぜんご}をかこひ、前間^{まつま}ちかく引^ひすへさせ。逆徒^{ぎやくしよ}が隠^{かざ}れ家草津^{いえくさづ}と押^およせ、鞠ヶ瀬主^{くじかせぬしゆ}從^つやすく、とからめ捕^{つか}、則^と秋夜^{あきよ}が母女房家來^{ぼふくわうじやうらい}歩藏^{ほざく}三人の囚人^{ごじん}、使^{つか}の聽^きへ引渡^{ひきよ}しと、言上程^{ごんじゆう}あく石堂勘解由^{せきとうかげゆ}、三方^{さんぽう}と逆徒^{ぎやくしよ}の首^{くび}跡^{あと}より家來^{いえら}が四人の首^{くび}桶^{おけ}に前^{まへ}遙^{はるか}に頭^{かしら}をさげ、實^{じつ}檢^{けん}とぞ披露^{ひらわす}する。今^ま初^{はじ}汝^{おの}が勳功^{くんこう}、氏満かく世^よ出^だしも、一人の子を殺^{ころ}したる、忠臣^{ちゆうしん}の影^{かげ}ゆへ

ぞとては落涙有ければ勿肺あきは謎やし、敵ながらも正行が情よて、
くわいたいの傾城伴ひ歸りしと、聞いて嬉しき葉末の姫わらはが恩有玉
川へ、我君様の妾ふなかのやゝに世繼と、殘る方なき貞女の詞、師泰の
討手の役目仕くぢつたる業腹よ、何があ功の出さばり頬夜盜非人よお
どりし其首三方とい何の事足下よかけんと立上れば、秋夜車輪の眼を
見ひらき夜盜などとい奇怪く、其首の楠正行、某秋夜とい仮の名、本名
は新田義興遊徒と成て斯成果るに覺悟の前、兩人さへあくならば、自然
と和睦も調んど、思ひ込しも天子の爲、かく計らふたる我存念と、忠義
の詞よ氏満公、君の爲民の爲、遊徒と成り死る忠臣、いさましも頼もし
とほ感の詞、かゝる所へ楠次郎正儀、南朝より和睦の勅書、武將の前よ指出
し遙さがつて扣ゆれば、氏満公押戴扱こそし、義興が詞よ違はず、皇居
の使、兩朝和睦取斗ひ、死後の妄執晴せん、其一言こそ義興が、冥途の

賜此上なしと繩目ながらも、解たる存念、師泰ハ猶居たま尺高せきこう、天下無双ぜんわむじょうの
大悪人、火水ひすいの拷問かうもん迄までてくれんと、山名諸共詰づめかくれば、氏満怒じめんのは聲高
くア師泰しが反逆ほんぎやく心こころ、兼てよりよく察さつせり、兩人宜しく斗たたかふべしと、上意
い遁のぞぬ網あ代ぢろの冰魚ひやう、師泰主從し殉ゆし、百年めど氏満公じめん公こうと切きかくるを、頼之
石堂透間せきとうとうまも見せず、今こそ誠の惡人おにじん退治たいぢたゞみかけてづだくよ、切き
合あせし三德さんとく兼備譽けんびを高き新田楠あらた、三ツの鼎かなへの足利あしかを納なる國くにハ千代萬例よあつたれ
を、代々よ傳つへける

明治廿五年六月三日印刷
明治廿五年六月五日出版

我加藤内
發行者兼
翻刻者

日本橋區通四丁目四番地

日本橋區新和泉町一番地

印刷者 瀧川三代太郎

發兌金 櫻堂

大平記水菊の巻